ISSN 0387-284X

読書科学

第24巻 第3号（通巻 第93号） 昭和55年10月1日 発行（季刊）

「かな」の読み・書きに関する
心理学的研究の展望　今井 靖親
福沢 周亮

漫画の理論　大城 宜武

読書材料と理解の関係（3）　池田 進一

曲名と歌詞との関係の比較文化的考察　守 一雄

93

日本読書学会

◇本　号　目　次◇

原　著

「かな」の読み・書きに関する心理学的研究の展望　奈良教育大学　今井靖親　筑波大学　福沢周亮　77

漫画の理論
——記号論的アプローチ——　沖縄キリスト教短期大学　大城宜武　99

読書材料と理解の関係（3）
——Legibility 要因の検討——　筑波大学　池田進一　112

曲名と歌詞との関係の比較文化的考察　筑波大学　守一雄　119

日本読書学会役員（昭和55年4月1日～昭和57年3月31日）

会　長（理事長）　滑川道夫
副会長（副理事長）　倉沢栄吉
常任理事　井上尚美　岡本奎六　阪本敬彦　福沢周亮　増田信一　湊吉正　村石昭三

理　事　井上敏夫　出雲路猛　岩坪昭子　大村はま　尾原淳夫　高木和子　田近洵一　野地潤家　深川恒喜　室伏武　望月久貴
監　事　平沢薫　山本晴雄

編集委員　出雲路猛　尾原淳夫　阪本敬彦　高木和子　田近洵一　野地潤家　福沢周亮　増田信一　John Downing　Donald Leton

The Science of Reading, Vol. 24 No. 3 (1980)

「かな」の読み・書きに関する心理学的研究の展望*

奈良教育大学　今井靖親
筑波大学　福沢周亮**

文字は情報を伝達するための一定の表記形態とそれに対応する音声，時には意味を備えた言語的記号であって，今日では人間の生活から切り離すことのできない重要な存在である。このため，文字に関する研究領域は，表1に示したように多岐・多方面に及び，さまざまなアプローチが試みられている。しかし，たとえば，国語学・言語学における文字の成立や変遷の研究にしても，心理学における読みのメカニズムの研究にしても，その本格的・総合的な解明は，まだほとんどなされていないと言わざるを得ない現状である。

ところで，今日，わが国で標準的に使用されている文字は，「かな」（平がな・片かな）・漢字・ローマ字であり，このほかアラビア数字も普通に用いられている。

表1 文字に関する研究領域

領域	研究事項の具体例
① 心理学における実証的な調査・研究の対象として	◎「かな」とローマ字の見やすさの比較，◎文字学習のレディネス，◎幼児・児童の読み・書き能力の実態，◎文字の習得と音節分解，◎筆順における誤りの分析など。
② 学校の国語教育における基本的指導の領域または事項として	◎国語科における文字指導，表記指導，書写指導の内容と方法，◎小学校1年生に対する拗音の表記の指導，◎辞書を利用した漢字指導，◎字形を正しく整えて書くための書写指導の実践など。
③ 幼児教育における保育原理・保育内容論として	◎幼児教育における文字指導の是非，◎幼児の知的教育としての文字指導のあり方，◎幼児のことば遊びとしての文字あそびなど。
④ 国語学・言語学などにおける文字論として	◎文字の成立・変遷，◎文字の機能，◎表記体系と正書法など。
⑤ 記号論の一部として	◎記号としての文字の意味・役割など。
⑥ 書道論として	◎書における文字の構造性，◎書造形の要素，◎執筆法・腕法など。

* A review of psychological research on reading and writing Kana letters.

** IMAI, Yasuchika (Nara University of Education) & FUKUZAWA, Shusuke (University of Tsukuba)

⑦　筆跡学として	◎筆速・筆圧の測定，◎筆跡と性格の連関，◎筆跡の鑑定など。
⑧　レタリングやグラフィックアートの対象として	◎レタリングやデザインの素材と技法など。
⑨　情報伝達の手段として	◎コンピュータによる種々の登録・計算などで用いられる文字・印字の機能， ◎その他，点字・暗号文字・字舞・電光ニュース・タイプライターなどにおける文字の役割とその利用など。

周知の如く，上代の日本には文字はなく，日本語の書記記号は中国の漢字を借用することから始まった。漢字は一字が形・音・義を表わすため表意文字の系列に属するが，その一字が本来中国語の一語を示すことから表語文字とも呼ばれている。「かな」は漢字を日本語の音声に対応させ，一字で形・音のみを表わせるように日本で創成された表音文字である。ローマ字が日本に伝わったのは室町時代の末期で，キリスト教の伝道のため来日したポルトガル人によると言われている。ローマ字も一字一音を表わす表音文字であるが，「かな」とは異なって一字一音素であるところから単音文字とも呼ばれている。

このような日本における複雑な文字体系の存在は，その正書法にも反映し，世界に類例のない独自の特徴を形成せしめている。すなわち，現在日本の正書法では，平がなと漢字のいりまじり文がたてまえとされているが，これとても古くは漢字を主体とした「かなまじり文」であったのが，今日では「かな漢字まじり文」に変ってきているし，実際には，これに片かなやローマ字も併用され，むしろ，“4種の文字のいりまじり文”が普通の表記形式として定着している。本来，正書法というものは一語一表記を原則とするのに，今日の日本語は，そのような理論的な正当性の原理よりも，日常使用する文字の読みやすさ・書きやすさという実利性の原理により強く支配され，上述の如く漢字，「かな」，ローマ字という異質の文字体系が混用されている。

こうした現実の中で，あるいは読み・書きの生理・心理学的メカニズムを追求し，あるいは児童・生徒に4種の文字とその正しい表記法を指導していかねばならないところに，日本特有の国字・国語問題の課題が存在しているのである。

そこで本稿では，こうした課題解決の一助とすることを目的として，文字に関する研究のうち，心理学の領域を中心として，特に「かな」の読み・書きに関する従来の研究を通覧し，初めに数量的な検討として，年代による研究テーマの変遷や，発表された研究の数的な推移などを分析する。ついで質的な検討として，各研究分野別に全体的な特徴，個々の研究の問題点，今後の課題などについての論述をおこなう。

なお，本稿において検討の対象を「かな」に限定したのは次の理由による。

①「かな」は文字名と音価とがよく一致している文字である。そのため文字名の習得が音価の習得となり，文字一音声の対応が能率的に，容易に学習される。また漢字と比べて習得すべき文字数もきわめて少ない。このような特性を備えていることから，日本では「かな」は就学した児童が学校で最初に学習し(平がな)，小学校3年生までには学習を完成させるべき（片かな）基本的な文字であること。

②今日，幼児の大部分は入学前に平がなの読みを習得しており，平がなの書きや片かなの読みさえも，ある程度可能となってきている。しかし，いぜんとして「文字の読み・書きは入学後」というたてまえ論が存続しているいっぽうで，知的教育・能力開発などの立場からは，幼児を対象とした意図的な文字指導も盛んに行なわれて

いる。このギャップを埋めるべき実証的・体系的な研究が乏しく，その推進が強く望まれること。

③最近，心理学・幼児教育学・国語教育関係の論文に，読み・書きに関する研究が目立って増加してきている。漢字の読みについては，すでに福沢（1976）によって教育心理学の立場から，その読字学習の機構や基本語彙に関する体系的な研究がなされ，公刊もされている。しかし，「かな」についてはこれまで十分な文献展望もなされていないこと。

方　法

1. 対象とする文献の年代の範囲

1946年（昭和21年）戦後の教育改革の一環として「当用漢字表」，「当用漢字音訓表」，「現代かなづかい」，「送り仮名のつけ方」が制定・実施され，現行の文字の種類や数の基礎が定まり，新しい表記法の使用が開始された。そこで本稿においては，その翌年の1947年から昨年の1979年までの33年間に公表された「かな」の読み・書きに関する172編の文献を主要な研究対象としてとりあげることにした。

2. 文献の収集源

本研究で対象とした文献は，主として次のものから収集した。

(1)「心理学研究」第22巻（1947年）～第50巻（1979年）。

(2)「教育心理学研究」第1巻（1953年）～第27巻（1979年）。

(3)「保育学年報」1962年版（1962年）～1972年版（1972年）。

(4)「読書科学」第1巻（1956年）～第23巻（1979年）。

(5)「日本心理学会大会発表論文集」第9回（1945年）～第43回（1979年）。

(6)「日本教育心理学会総会発表論文集」第6回（1964年）～第21回（1979年）。

(7)「日本保育学会大会研究論文集」第23回（1970年）～第32回（1979年）。

このほか上記の年代に刊行された「教育心理学年報」，大学の研究紀要，教育研究所や教育センターの研究紀要あるいは研究報告，「心理学評論」，「Reading Research Quarterly」，「児童心理」などについても検索を行ない，さらに，文字の読み・書きあるいは文字論などを内容とする心理学，教育学，保育学，小学校国語科教育，国語学，言語学関係の単行本にも可能な限り目を通した。しかし，見落しによって参照できなかったり，本稿で引用できなかった貴重な文献が他にもあると思われる。それらは今後補充して完全なものとしていくつもりである。

3. 研究領域および分野の区分

上記のようにして収集された「かな」の読み・書きに関する文献の中から，(1)心理学関係の論文，(2)国語教育・言語教育関係の論文を選び，(1)については，さらに次の8つの分野に分類を行なって検討することにした。

A．文字の認知に関する研究

可視性（Legibility）・可読性（readability）など，主として文字の知覚的な特性の研究。

B．読みの機構・過程に関する研究

読みの生理・心理学的メカニズムや読字行動のプロセスの検討。

C．読みの能力の要因に関する研究

読字能力の構成要因，読字能力と関連する要因の検討。

D．読みの指導法に関する研究

文字学習における文字の提示方法，絵の有無，音節分解，図形弁別訓練など，効果的な読みの指導法の条件の吟味。

E．書字に関する研究

書字行動の生理・心理学的メカニズム，書字能力のレディネス，書字指導の効果的方法など，書きに関する研究全般。

F．読み・書き能力の実態に関する調査・研究

読める文字，書ける文字の種類や数，読み・書き能力に見られる年齢差・性差などに関する実態の把握。

G．読字・書字に関する総合的研究

主として単行本の形で出版されている「読書」や「書きことば」に関する総合的な著述。

H．読み・書きの研究に関する展望

「展望」などの形で読み・書きに関する研究や文献を概観し，解説や論述を行なったもの。

結果と考察

従来，文献の表示は，すべて研究者名をアルファベット順に配列して論文の最後に添付する，という形式が採用されてきた。このため，本稿のような文献の展望では，研究テーマの全体的な特徴や相互関係や年代的な変遷が読者につかみにくいという不便さがあった。そこで本稿では表2に示すように，年代別・研究領域（分野）別に研究者名を略記して一覧表を作成した。いっぽう本誌の投稿規定により，本稿の最後にも従来の形式の文献欄が設けられているため，双方で多少重複する点はあるが，同じ文献にはそれぞれに同じ通し番号を付することで参照しやすいように配慮した。

表 2　「かな」の読み・書きに関する心理学的研究の領域・分野一覧

年代	領域	分野	文　献	計	合計
1947	(1)	F	(65)松本	1	1
1948				0	0
1949	(1)	A	(145)田中ら	1	2
		E	(80)三浦	1	
1950				0	0
1951	(1)	A	(146)田中ら	1	1
1952				0	0
1953	(1)	G	(112)榊原，(113)阪本	2	2
1954	(1)	A	(30)肥田野	1	3
		F	(54)国立国語研究所	1	
	(2)		(34)今泉	1	
1955	(1)	B	(55)国立国語研究所	1	3
		G	(114)阪本，(115)阪本	2	
1956	(1)	A	(102)小保内ら	1	2
		C	(96)中野	1	
1957				0	0
1958	(1)	C	(81)水口	1	2
	(2)		(98)滑川	1	
1959	(1)	D	(9)福沢，(10)福沢	2	4
		F	(157)富田ら	1	
	(2)		(89)村石	1	
1960	(1)	A	(48)北尾，(116)阪本	2	3
		G	(66)松本	1	
1961	(1)	A	(11)福沢，(117)阪本	2	2
1962	(1)	D	(142)田川	1	1
1963	(1)	F	(42)亀井，(86)守屋ら，(111)大西	3	3
1964	(1)	F	(144)田村	1	1
1965	(2)		(90)村石	1	1
1966	(1)	A	(62)松原ら	1	3
		E	(107)岡本	1	
	(2)		(168)横地	1	
1967	(2)		(129)須田	1	1
1968				0	0
1969	(1)	F	(46)岸井ら，(122)滋賀県教育研究所	2	3
	(2)		(134)薄田	1	
1970	(1)	A	(49)小林，(104)岡田	2	9
		D	(1)天野	1	
		E	(172)横山	1	
		F	(4)浅場，(37)石川，(38)石川県教育研究所	3	
	(2)		(12)福沢，(59)倉沢ら	2	
1971	(1)	A	(50)小林，(105)岡田	2	6
		D	(35)井野ら，(164)山田ら	2	
		F	(155)丹野	1	
	(2)		(166)山下ら	1	

1972	(1)	A	(147)田中ら	1	9
		B	(108)岡本	1	
		C	(70)三神	1	
		D	(130)須賀ら	1	
		F	(56)国立国語研究所	1	
		H	(118)阪本	1	
	(2)		(53)小島，(99)奈良女子大学幼年教育研究会，(169)横地	3	
1973	(1)	A	(148)田中ら	1	11
		C	(71)三神	1	
		D	(165)山田ら	1	
		F	(78)三木	1	
		G	(106)岡田	1	
		H	(13)福沢	1	
	(2)		(63)松原ら，(72)三神，(87)村田，(91)村石，(110)大久保	5	
1974	(1)	A	(64)松倉，(149)田中ら，(150)田中ら	3	14
		C	(73)三神	1	
		D	(132)杉村	1	
		E	(19)浜崎，(92)村石	2	
		F	(121)佐藤	1	
		G	(88)村田	1	
	(2)		(6)藤田，(58)倉橋，(74)三神，(93)村石，(94)村石	5	
1975	(1)	A	(7)藤田，(151)田中ら	2	15
		B	(52)小石	1	
		C	(39)岩崎ら	1	
		D	(133)杉村ら	1	
		E	(20)浜崎ら	1	
		F	(159)土山ら	1	
		H	(109)岡本	1	
	(2)		(3)荒木，(14)福沢，(60)倉沢，(75)三神ら，(76)三神ら，(137)首藤，(138)首藤	7	
1976	(1)	A	(152)田中ら，(153)田中ら	2	11
		C	(40)岩崎，(131)菅	2	
		E	(21)浜崎ら，(22)浜崎ら，(67)松村ら	3	
	(2)		(83)森，(95)村石，(123)清水，(139)首藤	4	
1977	(1)	A	(50)小林，(154)田中	2	20
		C	(41)岩崎	1	
		D	(5)藤野ら，(15)福沢，(124)Steinbergら，(125)Steinbergら，(126)Steinbergら	5	
		E	(23)浜崎ら，(24)浜崎ら，(31)今井ら	3	
		H	(143)高木	1	
	(2)		(16)福沢，(36)井上ら，(81)守，(84)森，(119)佐々木，(135)鈴木ら，(140)首藤(167)幼児言語研究会	8	
1978	(1)	B	(156)東條	1	21
		C	(44)河井ら，(160)辻西ら	2	
		D	(2)天野，(127) Steinbergら，(163)若林ら	3	
		E	(25)浜崎ら，(26)浜崎，(27)浜崎，(158)登根ら	4	
		F	(101)庭山ら	1	
	(2)		(7)藤原ら，(47)北原ら，(57)近藤ら，(61)栗原，(68)松尾沢，(77)三神，(85)森，(136)鈴木ら，(170)横地ら，(171)横地	10	
1979	(1)	A	(141)田井中	1	18
		C	(45)河井ら	1	
		D	(32)今井，(69)松崎ら，(103)岡ら，(128)Steinbergら，(161)Tzengら	5	
		E	(17)福沢ら，(28)浜崎，(29)浜崎，(43)柏原，(162)上田ら	5	
		F	(79)箕川，(100)野呂	2	
		H	(18)福沢ら	1	
	(2)		(33)今井ら，(97)中村ら，(120)佐々木ら	3	

1. 量的検討

まず表2をもとに1947年から1979年までの33年間における「かな」の読み・書きに関する研究を概観してみると，1969年までは年間2～3編の研究発表が見られるだけである。中には1948年，1950年，1957年，1968年のように該当する研究が見あたらない年もあった。要するにこの種の研究テーマは，ほとんど顧みられない状態だっ

たと言えるのではなかろうか。もっとも，本稿では心理学関係の学会の研究発表や，紀要等における文献を主としており，そのうえ，雑誌類に掲載された論文は，特別のもの以外は，すべて省略したため，特に国語教育・言語教育関係の文献から，実践的研究の多くを欠落させる結果となっていることは否めない。

そこで，対象を比較的データのそろっている心理学関係の研究発表だけに限定し，過去30年間を10年間ずつの，1950年代，1960年代，1970年代の3つに区切って，発表された研究数を比較してみた。その結果，1950年代，1960年代は，ともに14であるのに対し，1970年代は86で全体の約76%を占めていることがわかった。すなわち，「かな」の読み・書きに関する心理学的研究は，1960年代までは，きわめてわずかしかなされていなかったが，1970年代に入ってから活発に研究が行なわれるようになり，現在も増加の傾向が認められるのである。

次に，上記の3つの年代について，心理学関係の研究分野別に発表論文数を比較してみたところ，図1のような結果が得られた。各研究分野別の特徴について簡単に述べておこう。

A．「文字の認知に関する研究」はどの年代でも主流の1つとなっていて，各年代を通じて常に心理学者から関心を持たれた分野であることがうかがえる。

B．「読みの機構・過程に関する研究」は，分野別では最も数が少なく，我々が調べた範囲では現在までわずかに4つの研究が認められるだけである。

C．「読みの能力の要因に関する研究」は，1950年代，1960年代にはほとんどなかったが，1970年代になってようやく盛んになってきている。

D．「読みの指導法に関する研究」も同様に1970年代に入ってから急速に増加している。

E．「書字に関する研究」にも上記(3)，(4)と全く同様の傾向が見い出される。

ただし，表2からも明らかなように，A，D，Eの分野の研究数が多いのは，特定の研究者が同一のテーマについて，毎年継続して，時には1年に3つも研究を発表しているためだとも言える。

また，「書字」に関する研究は，本稿ではすべてEに分類されているが，「読み」と「書き」を対比させて考えるならば，本来「書字」にも上記のA，B，C，Dなどの分野が別に独立して設けられるべきなのである。このような観点からみると，「かな」についての「書き」の分野の研究は，「読み」の分野の研究と比べて，問題にならぬほど数が少ない現状と言える。

F．「読み書き能力の実態に関する調査・研究」は，1960年代の後半から1970年代の前半にかけて比較的多く，それ以後も毎年1～2編の研究発表が行なわれている。

G．「読字・書字に関する総合的研究」は，他の分野の発展に依存しているので，やむを得ないとも言えるが，むしろ1950年代のほうが多く，1970年代に入っても，1，2の著述以外に見るべきものがない。

H．「読み・書きの研究に関する展

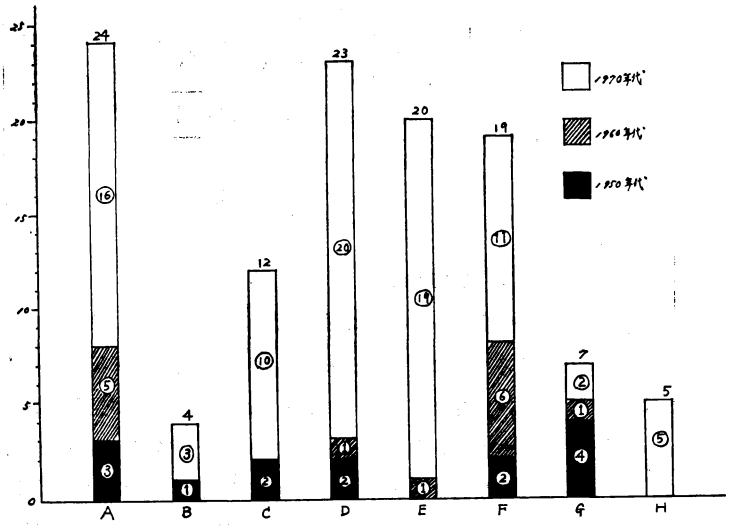

図1　研究分野別発表論文数〔1950年～1979年〕

望」は，1970年代になって初めて現われ，これまで5つを数えるまでに至っている。

2. 質的検討

引き続いて各分野ごとに質的な検討を行なっていくが，対象は，やはり心理学的な研究に限った。

A. 文字の認知に関する研究

心理学的に見るとき「読み」には少なくとも，①まず提示されている文字という記号（文字素）を視覚的にとらえ，その形態的特徴を知覚し，他の文字素から弁別する(letter discrimination) 過程，②視覚的にとらえた文字記号に，その文字記号固有の音声（音素・音節など）を連合させる (letter-sound correspondence) 過程，③さらに②または①に伴って，文字または文字で構成されている語や文から，意味を抽出する (comprehension) 過程の3つが考えられる。文字の認知の研究は，主として①または②の過程に関連する。

a. 弁別しやすさの検討

いかなる文字体系にも，視覚的に混同されやすい文字が必ず含まれている。たとえば，平がなにおける「め」と「ぬ」と「ね」，片かなにおける「ソ」と「ン」，「シ」と「ツ」，アルファベットにおける「d」と「b」，「p」と「q」，ロシア文字における「Л」と「П」，「Ш」と「Щ」などがこれである。こうしたまぎらわしい類似性を克服して，文字の正確な弁別が達成されるためには，そこに存在する構成部分の差異あるいは共通性を発見することが必要である。

小林（49，50）は幼児・児童を対象として，抹消テストを用いて，平がなの弁別されやすさを検討している。幼児と小学校1年生について，認知されやすいとされた文字を，1位から7位まで示すと，幼児では，「へ」「も」「よ」「の」「に」「ゆ」「し」小学校1年生では，「へ」「り」「み」「ゆ」「ほ」「ま」「つ」であった。彼はこの研究で，平がなの認知されやすさを規定する形態的要因として，「単純性」，「直線性」，「非類似性」をあげ，さらに，文字自体のもつ有意味性をも考慮に入れるべきではないか，と述べている。小林（51）は，さらに因子分析によって，平がなの同定認知を規定する要因を発達的に分析・検討しているが，岡田（104，105）も同じく抹消テストを用いて，幼児について平がなの弁別における誤りを調べ，「ぬ」と「め」，「ほ」と「は」，「ぬ」と「ね」，「き」と「さ」など，混同の多い文字の対を明らかにしている。

田中ら（147，148，149，150，151，152，153，154）の一連の研究，および藤田（7）も，すべて抹消テストを用いて文字弁別を発達的に検討したものである。彼らの研究からは，文字弁別能力が年齢の上昇に伴って向上し続けること，男子よりも女子のほうが成績がすぐれていること，文字の縦組と横組では後者のほうが弁別されやすいこと，その他，文字の認知に関する多くの知見が得られている。しかしわれわれにとって気がかりなのは，この種の抹消テストによる文字弁別能力の測定では，抹消行動における指・手・腕の運動能力の発達要因がまったく考慮されていないことと，使用されている文字が読めるか否か，すなわち被験者の読字力が統制されていないことである。実験に際して，これらの条件が十分考慮されていないと，文字の弁別しやすさといっても，それが文字自体の特性によるのか，あるいは被験者の側の発達的要因によるのか，肝心な点が不明確のままになるおそれがある。

b. 読みやすさの検討

日本語では，「かな」のほかに漢字，ローマ字などが使用されていることについては最初に述べたが，これらの文字のうち，どれが，あるいはどの組合せが読みやすいかについて，すでに1940年代から研究されている。

田中ら（145，146）と肥田野（30）は「かな」とローマ字について，小保内ら（102）は「かな」，ローマ字，漢字，英字について，実験的に読みやすさを比較したものであり，北尾（48），田井中（141）は，平がなと漢字まじり文とを比較したものである。いずれも読みの時間的速さや内容の理解などを測度としているが，「かな」はローマ字よりも，また「漢字まじり文」は「平がな文」

よりも読みやすい，という結果が得られている。このほか，阪本(116)は眼球運動における停留時間と逆行数などを測度として，漢字表記と「かな」表記について比較を行なっている。さらに阪本(117)は，縦書き文と横書き文について読みやすさを検討し，松倉(64)は平がなの読みにおける文字の形の類似性や音韻の類似性の効果を調べている。

従来のこの分野の研究に共通しているのは，「見やすさ」とか「読みやすさ」を，主として文字の知覚という「視覚的情報」(visual information)のレベルでとらえようとしていることである。福沢(11)は読みにおける語の意味的側面に注目し，同じ文字でも“ファミリア・ワード”すなわち意味をよく知っている文字列(語)のほうが知覚されやすいことを見い出しているが，このように文字あるいは語や文の読みやすさの研究は，今後はもっと読みにおける「統語的情報」(syntactic information)や「意味的情報」(semantic information)の処理について分析を進めていくべきであり，そのためのアプローチが工夫されるべきではなかろうか。

B．読みの機構・過程に関する研究

先に述べたように，わが国では読みのメカニズムやプロセスに関する研究がとくに貧弱で，本稿でもこの分野に属するものとして，次の4つをあげ得るに過ぎなかった。まず国立国語研究所(55)は，音読における読み誤りをタイプ別に示し，その原因を考察した研究である。豊富な事例が参考となるが，どちらかといえば，文法論ないしは語彙論的な分析に傾いていて，心理学的な読みの過程の分析としてはもの足りない。次に小石(52)は文章の読解力と読字速度・知能・性差との関係を検討し，結論の中で，「文章の読解力は単語を単語として読んでいるか否かによるのではないか」という興味ある推測を行なっている。しかし，この研究も読みの機制・過程に本格的に取り組んだものとはいいがたく，むしろCの「読みの能力の要因の研究」に分類されるべきものかもしれない。

東条(156)の研究では，大脳半球の優位性の検討に関連して，大脳における「かな」と漢字の処理に差異があるらしいことが示唆されている。もしもこの点が解明されれば，「かな」と漢字の違いは，単なる表音文字・表意文字というような言語学的な差異のレベルを超えて，大脳半球における視覚および聴覚パターンの情報処理という問題にまで発展する可能性も考えられる。

最後に岡本(108)の論文は主としてSmith(1971)の紹介である。これを読むだけで読みのメカニズムやプロセスを理解するうえでたいへん参考になる。その後，1973年にSmithらによってPsycholinguistics and Readingが，また1975年にはGibsonらによってThe Psychology of Readingが出版されているが，これらを読むと，欧米における読み・書きに関する研究の進歩に比して，わが国のこの分野における研究の立ち遅れの大きさを痛感させられてしまう。しかし，日本の文字の読みには，アルファベットのような音素文字を主体とした読みの原理を，ストレートに適用しきれない側面がある。それゆえ，今後は漢字や「かな」を用いて，日本語の読みにおけるメカニズムやプロセスを解明していくような研究を行なっていくことが必要だと思われる。

C．読みの能力の要因に関する研究

a．文字の習得と知能および読書レディネス

中野(96)は，児童の入学当初，1学期末，2学期初め，2学期終りの4回「かな」の習得状況を調べ，とくに知能との関連を考察し，「かな」の学習には知能要因も重要ではあるが，他の発達要因も考慮すべきことを指摘した。また水口(81)は，5歳児について平がな清音46文字の読み・書きを調査し，別に読書レディネステストを実施した結果，約80%の者がすでに読みのレディネスを備えている事実を得た。彼はこの結果をもとに，幼稚園において文字指導の方法を考えるべき時期にきていることを指摘している。その後，1972年から三神(70, 71, 73)が一連の研究を発表するまで，「かな」を対象としたこの分野の研究は見られない。

b．文字学習と学力

三神は幼稚園での文字学習の経験者と未経験者につい

て，読字力や読書レディネスの差異を調べたり，その追跡研究として，小学校入学後の学力（国語・算数）への影響を検討している。彼女の一連の研究から引き出された「3歳，4歳で“つめ込み主義”的に文字を教えても，むしろ逆効果である」という結論は，それだけを見れば確かに興味深いし，幼児期における文字指導の弊害を説く人たちの1つの理論的根拠にもされているようである。しかし，われわれは三神の実験方法，結果の出し方，結論の導き方などに多くの疑問をもっている。

1例をあげれば，三神（71）は初めから被験者を「文字指導を受けた群」と「受けない群」に分けて，国語の学力点や知能偏差値を比較し，その数値から「文字指導を受けない群」のほうが成績がよい，という結論を導いている。しかし，心理学で，ある操作（ここでは文字指導）の効果を検討する場合には，まず最初に等質とみなされる実験群と統制群（比較群）とを作り，次にそのうちの実験群に対して操作（すなわち文字指導）を行なってから，さらに両群について同じテストを実施してみて，初めてその差異を問題とすることができるのである（今井，1979参照）。ところが，三神の実験において，「文字指導を受けた群」と「受けない群」が文字指導を受ける前に，知的能力その他の点で等質であったという保証は何も示されていないのであるから，入学後の国語の学力に差が誤められたとしても，それが「文字指導」のためだとはいえないのである。もちろん入学後の知能偏差値などをそろえてから学力の比較をしたとしても（三神73），上記の統制群法の根本的な誤りは修正されていない。

三神に限らないが，社会的影響のきわめて大きい仮説（たとえば「幼児期の文字指導は効果がない」，「幼児期の漢字指導（英語教育）は有効である」など）を検証しようとする場合には，何よりもまず，厳密な科学的手続きに基づいてデータを作成すべきであるし，結論の導き方もできるだけ慎重であってほしいと思う。

c．読字力とその関連要因

ところで，岩崎ら（39，40）も，実験的・意図的に文字指導を行なっている幼稚園と，特別の文字指導を行なっていない幼稚園の園児について，平がなの読み・書き能力を比較し，さらに文字習得を条件づけている要因を明らかにしようと試みている。その結果，書きの能力では文字指導の影響が多少現われたが，読みの能力には有意差はなかったと報告している。このほか岩崎らは図形や位置の認知能力，幾何図形の描画能力，音楽能力，知能，性格，家庭における文字環境（たとえば文字積木の有無など）を，菅ら（131）も同様に家庭における環境を，辻西ら（160）は図形模写力を，いずれも読み・書きに関係のある要因とみなして，その関連性を求めている。読み・書きの要因を明らかにしようとするこのようなアプローチは，それなりに評価できるが，関連要因と思われるものについて，わずか1，2種類のテストを行なって，せいぜい読字力との相関係数を求める程度では，結局決め手を欠き，不明確なままに終るのではなかろうか。

この点，河井ら（44，45）の研究が参考となる。彼らは文字学習のレディネスとして，①文字パターンの弁別能力，②発話語い能力，③聴取語い能力，④概念化の能力，⑤発音能力，⑥音節分離能力などを想定し，読字との相関や，これら下位能力間の相関を求めた。その結果，読字との相関がもっとも高かったのは発話語いで，以下聴取，音節分離，概念化，発音の順であった（①の文字パターンの弁別能力については，他の研究でもすでに読字力との相関が高いことが明らかにされているので，今回の分析対象から除外された）。

読みの能力の要因を解明するためには，漢那（1979）のように因子分析などの方法に頼るほかに，先に指摘したごとく，読みの過程の生理・心理学的な分析がどうしても必要となってくる。今後はそうした研究に期待したい。

D．読みの指導法に関する研究

a．文字の提示法の効果

首藤（138）や福沢（15）によって指摘されているように，わが国の国語教育は，読み・書きの学習指導に関し

て，解決すべきいくつかの問題を抱えてきた。たとえば，「平がな先習か」，「片かな先習か」，「音声法か」，「語形法か」という論争がそれである。このほか，文字を学習する際のさし絵の効果，読字学習・書字学習の分離の可否，あるいは学業不振児・言語障害児に対する読み・書きの指導法など，教育実践の場では解決を迫られている種々の問題が山積していたにもかかわらず，1970年代に入るまでは，それらの課題解決に役立ち得るような教育心理学的アプローチはほとんど見られなかった。この点，福沢（9, 10）の研究は，この分野では戦後初めて，読みの具体的指導法を厳密な実験計画に基づいて詳細に検討したものであり，教育心理学の立場から国語学習を実証的に研究したことの意義は大きいと考える。この研究において福沢は，平がな指導における一字指導と語形指導の効果を統制群法を用いて比較・検討し，その結果，入門期における読みの学習指導法として，いわゆる「音声法」と「語形法」とを併用することが望ましいとの結論を得ている。

その後，藤野ら（5）は種々の文字提示法の組合せを作って，読字学習における効果的な指導法の吟味を行なった。彼女らは，①1字読みのほうが単語読みより学習が早いこと，②個々の文字に意味づけをしたり，絵とともに提示したりして興味づけることは，初めは効果的だが，課題が進行しない場合は魅力を失う，という結論を示している。しかし，われわれは①については，1字読み群と単語読み群の学習すべき文字数が異なっているので単純な比較は不可能であり，②については，もっと厳密に条件を統制したうえで比較すべきである，と考えている。

b．種々の訓練の効果

ところで，杉村（133）は，文字の読字学習に及ぼす弁別訓練の効果を検討し，図形や文字の弁別訓練が文字の読み学習に有効であることを見い出している。従来，文字の読みのレディネスとしては，このような視覚的弁別能力が重視されてきたが，天野（1）は，これを話しことばの発達という面から実験的にとらえようと試みた。すなわち，彼は文字の読みの学習を可能にする重要な内的準備条件として，「語の音韻構造の分析能力」に注目し，幼児について，発達的にこれを研究した結果，①自然条件のもとで日本語の基本的音節を分解できるのは4歳半であるが，組織的に訓練すればもっと低年齢の幼児でも可能であること，②この年齢段階の幼児は，長音・促音・拗音などの特殊音節についても音節分解は可能であること，③音節分解・抽出と文字の習得には相互作用があること，などを明らかにしている。とくに③について触れるならば，彼は，〔話しことばの段階〕語の音韻構造を分析する行為の発達・形成⟶〔文字習得の段階〕一定の量（20前後）の文字の読みの学習⟶文字を学習する学習能力＝（その重要な構成要素をなしている）語を音節に分解し，音韻を抽出する行為＝の形成⟶文字学習量の急速な増大，という形で音韻抽出能力の発達と読字力の発達の「相互作用」を推論的に示しているが，文字の習得過程を明らかにするためにも，できれば，これを実験的に分析・検証していくことを希望する。

その後，天野（2）は，上記の研究を発展させ，①長音の自覚形成，および②長音の表記学習のための教育プログラムを作成し，これらが幼児の特殊音節の自覚形成や表記規則の習得に有効であることを見い出している。この教育プログラムは，単に幼児の文字学習に有効なだけでなく，学習遅滞児や言語障害児の言語学習にも役立つものとして期待される。

c．漢字と「かな」の学習難易度

次に Steinberg らの一連の研究（124, 125, 126, 127）は，すべて「かな」と漢字の読字学習における難易度を比較したものである。これらの研究の中で具体的に検討された項目の一部を挙げてみよう。

Ⓐ個々の「かな」と「漢字」はどちらが学習しやすいか。

Ⓑ「かな」で表記された語（例.「ゆき」，「のぼる」），と漢字で表記された語「例.「雪」，「登ぼる」とでは，学習難易度が異なっているか。

Ⓒたとえば「かな」の“れ”に“ユキ(雪)”，反対に，

漢字の“雪”に“レ”という発話音を連合させた場合，どちらが学習しやすいか。

これらに対し，Steinberg らの示した実験結果は次のとおりである。

Ⓐ′ 幼児は個々の「かな」よりも漢字をより速く学習する。

Ⓑ′ 「かな」で表記された語よりも，漢字で表記された語のほうが学習が容易である。

Ⓒ′ 漢字も「かな」も，それぞれ単語レベルの発話音（“雪＝ユキ”，“い＝ウミ”など）で学習したほうが，シラブルレベルの発話音（“海＝イ”，“雪＝レ”など）で学習するよりも成績がよい。

こうした結果をもとに，Steinberg らは次のような結論を導いている。

①上記のⒷ′より，漢字は「かな」と比べてむつかしくない。逆に「かな」のほうが漢字よりやさしいというのは，科学的根拠がない。

②「かな」には「新語」（漢字）が出てきたとき，「ふりがな」としての用途がある。だから漢字は初めから漢字で，片かなも最初から片かなで教えるべきである。

Steinberg らの研究には，従来の心理学や国語教育などの研究には見られない着想の斬新さがある。しかし，残念ながら実験方法，考察，結論などに多くの問題点が見い出される。その一部をここに示しておきたい。

上記のⒶおよびⒶ′において，Steinberg らが実験材料として用いた漢字の半数は，たとえば「美しい」（彼らはこれを“漢字形容詞”と呼んでいる），「生れる」（同じく“漢字動詞”）などであった。彼らはこれらの読みと，たとえば1字の平がな「り」とか「ぬ」の読みを，3歳，4歳の幼児に学習させ，その結果を比較しているわけである。要するに，Steinberg らの実験は，形・音・義をもった漢字（しかも，半数は平がなが付随している「混合文字列」）と，主として形と音とをもった平がな（1字）の材料を用いて，対連合学習をさせたことになる。そして，結局は，「言語材料を用いた対連合学習においては，刺激項（または反応項）が有意味なもののほうが，無意味なものよりも記憶されやすい」という。この分野ではすでに常識となっている事実を，改めて示したに過ぎないといえる。実はⒸおよびⒸ′もまったく同じ原理で説明のつく事柄であって，これを新たに別の実験として行なっている理由が分からない。もしも厳密に「かな」と漢字の読字学習の難易度を比較しようとするならば，今井(32)のように「木」と「キ」，「目」と「メ」など，音節数・有意味度・熟知度などを統制した材料を用いるべきである。これらの材料に絵を添えて，幼児の読字学習を比較してみたところ，漢字と片かなの学習難易度には有意差が認められなかった。

Tzengら(161)も Reading Research Quarterly (Vol. XIV, 1978-1979, No.1) に掲載された Steinberg らの論文に対して，鋭い批判を加えている。Steinberg ら(128)はこれに反論を行なっているものの，Tzeng らが主として Steinberg らの実験における方法論上の問題点と，そこから導かれた結論の誤りを指摘しているのに対し，Steinberg らは，自分たちが結論で述べた辞句的表現を，Tzen らが正確に受けとめていない，と非難するだけにとどまっているので，実のりある議論とはなっていない。

なお，岡ら（103）は，Steinberg (127) では検討されていなかった問題，すなわち文字を学習させたあとの保持について調べ，保持は平がなよりも漢字のほうがよいことを見い出している。この点については，片かなと漢字について学習難易度を比較した前記の今井（32）の結果と同じである。日本語を代表する文字の種類により，このように異なった特性があるのは興味深いことであり，今後，さらに詳細な検討を行なっていきたい。

d．文字学習における絵の効果

ところで，初学者に文字を教える場合に，よく絵が用いられるが，杉村(132)は幼児が単語の読みを学習する際に，単語のみを示す場合と，単語とその絵を一緒に示す場合のいずれがよいかを，片かなと漢字を用いて実験的に検討し，絵がないほうが文字をよく学習することを

見い出している。これは Samuels (1967) が行なった実験の結果と同じであった。そこで松崎ら (69) および今井 (32) は，絵の提示方法を文字と絵の同時提示と継時提示に分けて比較してみたところ，松崎らでは，継時提示にしても，やはり絵の妨害効果が現われたが，今井では絵と文字の継時提示のほうが，同時提示よりも読字学習に有効であることが確認された。今井 (32) が第2実験において，漢字について単語のみを提示する場合と絵と単語を継時的に提示する場合のいずれがよいかを検討したところ，ここでも後者のほうが読字学習に効果のあることが見い出された。松崎ら (69) の実験には，学習材料のほか，実験方法に，たとえば絵の提示効果をみようとしながら，「この絵が○○だね」，「この字が○○と読むんだよ」などの教示を与えるため，絵と音声の連合をも混入させている難点がある。再吟味が必要ではなかろうか。

e．文字を媒介とした言語行動の形成

最後に田川 (142)，山田ら (164, 165) 井野 (35)，須賀 (130)，若林 (163) の研究は，心身に障害をもっている子どもたちに，文字（主として「かな」）を媒介として，言語行動を形成させる試みをまとめたものである。事例研究的なものが多いが，文字学習に関する新しいアプローチの分野として今後の成果を期待したい。

E．書字に関する研究

量的検討のところでも述べたように，「かな」の書字に関する心理学的研究は少なく，本稿でも過去33年間にわずか21を数えるのみであった。

a．書写（習字）における評価

まず三浦 (80) は，小学校2年生の児童に書かせた平がなを，師範学校卒業生中の能筆者に，5段階評価させ，各文字の難度を比較した。そして，平易な字として，「い」「く」「し」「せ」「つ」を，難字として「ひ」「ふ」「む」「ゆ」「ら」などをあげている。

また，岡本 (107) は，書写の評定に関して，字形・文字の性質・文字の空間性の3つの観点をあげ，これに基づいて，評定方法の信頼性・妥当性・客観性を確かめるため，実験的な検討を行なっている。

その後，書写または習字に関するこのような心理学研究は見当らず，わずかに最近，禰津 (1978) に新しい研究の芽ばえを見るのみである。

b．筆順・字形の習得

書写と関連して，村石 (92) の研究は，幼児の筆順に関して行なった貴重な教育心理学的研究といえよう。彼は，低年齢児童の書写行為における書く順番の誤りは，彼らのとらえる字形の視覚的特徴に基づく筆順ルールの非適合性によるものとの仮説を設定し，これを検証しようと試みた。材料には，＋，||などの図形が11個，平がな11字，片かな12字，漢字11字が用いられ，これらの視写結果が読字能力との関連で検討された。その結果，①不読児は主部エレメントを付加エレメントより優先して書く傾向がある。②不読児と良読児とでは，すべての平がなで筆順に有意差が認められる。③幼児の筆順には再現性がある（正しい筆順でも，誤った筆順でも，一度習得したらその筆順を繰り返す傾向がある）などの事柄を見い出している。

今井ら (31) は，従来，国語教育などの場で，字形や筆順の学習に用いられてきた指導法のうち，どのような指導法が効果があるかを実験的に確かめている。彼らは，平均年齢5歳8か月の，平がなの読みを獲得している幼児を，実験群と統制群に分け，4種類の指導法でロシア文字を書かせて，その成績を比較した。その結果，①正しい書字のためには，単に字形を示すだけでなく，字形とともに筆順を示して指導するほうが効果的である。②正しい筆順の習得には，単に番号や矢印で筆順を視覚的に示すだけでなく，運動感覚や触覚などの手がかりをも併用するほうが効果的である，などの点が明らかにされた。

村石 (91) や今井ら (31) のこうした研究を1つの基礎として，今後さらに字形や筆順の学習における機構は何かとか，正しい字形や筆順を学習するためのレディネスは何か，などの基本的な問題を実験的に確かめていくような接近が必要であろう。

c．幼児の書字行動，小学生の作文に関する研究

松村ら（67）の研究は，一人の幼児の書きの習得過程を，事例研究的に追跡したものであるが，彼らは幼児の行動から書字行動だけを抽出して記録しているために，重要な読み書きの関連的発達がとらえられていない。その点からいえば，主人公リナが読み・書きを習得していくようすを描いた，Fröbel（荘司）（1973）の物語や，藤田(6)に紹介されている「三歳児『鼓子』の文字学習」が参考となろう。

柏原（43）は鏡映文字の書字と性差・利き手・利き目などとの関連について発表しているが，これらについては図形認知の研究（たとえば田中1967）や利き手の研究でも別に扱われているので参照していただきたい。このほか，横山（172）は小学校1～3年生について，作文力の発達を検討している。刺激図としてWISCの絵画配列テストの「田植え」と「雨」を児童に示し，“お話し”を書かせるという方法がとられた。その結果，学年の上昇に伴って，①1編の作文の長さが長くなっている。②文節を基準とした文の長さが長くなっている。③使用される文構造の種類が多様化することが分かった。国語教育において「書き」の学習の重要な位置を占めている作文に関しては，心理学的研究のまったく未開拓な領域である。今後はこの方面の教育心理学的研究を行なっていく必要があるが，福沢（17）のように，「書き」を対象認知や思考過程およびその言語化，という観点からとらえていこうとする新しい動きも現われ始めている。

d．幼児に対する書字の一斉指導・なぞり行動の発達

さて，書字に関する研究分野の1つの特徴は，浜崎と登根らの研究が，全体の約60%を占めているほどに多いことである。そのうち，浜崎ら（19，20，21，22，23，28）は，(A)「幼児に対する平がな文字の一斉指導法」に関するものであり，それ以外の浜崎ら（24，25，26，27，29），登根ら（158）は，(B)「幼児のなぞり行動の発達」に関するものである。

まず，(A)に関する一連の研究から，彼らによって明らかにされた事柄と，研究方法における問題点とを列挙して見よう。

(A)①適切な指導法があれば，幼児に対する平がな文字の一斉指導は可能である（19）。しかし，4歳以下の幼児に対する平がな文字の一斉指導は不可能である（21）。

②平がな文字の一斉指導においては「湧出法」が有効である（19）。

③「湧出法」は文字習得への意欲を高めを効果をもっている（20）。

〔問題点〕ⓐ…①～③に関して……事前テストにおける書字力が各群等質であるか否かを検定していないで，事前テストと事後テストとの差のみで効果を判定している。

ⓑ…①～③にに関して……事前テスト段階での被験者の読字力が調べられていない。また読字力の影響が考察されていない。

ⓒ…②に関して……「語形法」の意味を誤っている。教示から見ると，首藤（138）のいう「『もじのほん』式音声法」に近いと思われる。

ⓓ…①～③に関して……「一斉指導法」の検討とあるのに，「集団」の要因についてはまったく触れていない。

次に，(B)の「なぞり行動の発達」に関する研究で明らかにされた事柄と，研究方法上の問題点をあげておく。

(B)①年齢が上昇するにつれて，文字のなぞり行動が発達する（24）。

②男児より女児の発達が速い（24，27）。

③個別指導場面と一斉指導場面では，後者のほうが成績がよい（25）。

④鉛筆の長短によって，なぞり行動の発達は影響を受けない（25）。

⑤地域による発達の差が認められる（26）。

⑥4，5歳では，なぞり→視写→聴写という習得プログラムは，書字の習得に有効である（28）。

〔問題点〕ⓐ…①～⑥に関して……調査用紙に筆順を示す手がかりとして，矢印や番号が書かれているが，こ

れらの利用についての統制がない。

ⓑ…③に関して……集団場面では他人のを見てなぞり方を模倣する恐れもある。また，集団指導の前に個別指導をやっているので練習効果が生じていると思われる。

ⓒ…⑤に関して……「地域」の選び方や「地域差」の基準がきわめて曖昧である。

ⓓ…⑥に関して……ここでいう「聴写」は「視写」の再生である。音声を聞かせることなしに（しかも，ここでは読めない文字を）記憶を頼りに書かせるのは聴写ではない。

書字に関する研究全般にいえることであるが，模写，なぞり，筆順などの発達的研究を，単なる年齢差，性差，地域差の記述に終らせてはならないし，また字形の正誤，用具の影響などの研究を，単なる技能ないしは技法レベルの検討に終らせてはならないと考える。今後は，これまでほとんど手をつけられていない問題，たとえば書字行動と手・指・腕などの運動機能の発達との関係，書字における眼球運動，文字を読むことと書くこととの発達的な相互関係，ことばによる表現としての書字行動の発達など，の解明にも研究を拡大していくことが要請されるのである。

F．読み・書き能力の実態に関する調査・研究

「かな」を対象とした読み・書き能力の実態調査となると，必然的にその対象は小学校1年生と幼児に限られてくる。しかし，実際には1年生を対象とした調査は，本稿では国立国語研究所（55），大西（111），石川県教育研究所（38）に見られるに過ぎない。他はすべて幼児を対象とした調査・研究である。このことは，1970年以降は，「かな」の読み・書き能力についての研究者や教育実践家の興味・関心は，小学校1年生から，完全に幼児を対象としたものに移行したことを示唆している。

本稿では個々の調査結果についての紹介や論評は省略したが，われわれが残念に思うのは，過去このように多くの実態調査が行なわれ，豊富なデータも得られていながら，これらの貴重な調査結果や分析データが，幼児教育における言語指導や小学校1年生の国語教育の改善に役立てられていないことである。その原因は読み・書き能力について調査をする側にあるのであろうか。それとも，出されたデータを活用すべき側にあるのだろうか。いずれにしても，これは教育心理学的な調査・研究のあり方に関連する重要な問題であろう。ただ，現在のわれわれの観測では，1972年に国立国語研究所の大規模かつ詳細な実態調査（56）の結果が公刊されてからは，この分野に属するような個人的研究発表は下火となり，現在では単なる調査からの発展として，Cの「読みの能力の要因」の探索へと，研究が変りつつあるように思える。

G．読字・書字に関する総合的研究

この分野における最近のすぐれた著述として，村田（88）をあげることができる。これは，彼の「幼児の言語発達」，「幼児のことばと発音」，「幼稚園期の言語発達」の続編であって，具体的には，①書きことばの概観，②読みの発達，③文字弁別，④字読み，⑤音節分解，⑥語の読みと理解，⑦文の読みと理解，⑧読みの指導などを扱っている。今日わが国には，文字の読み・書きに関する内外の心理学的研究を，これだけまとめた書物は，他に見当らないといえよう。読み・書きについて研究しようとする者の必読書として推奨したい。

H．読み・書きの研究に関する展望

本稿で取り上げた「かな」の読み・書きに関する「展望」以外に，実は過去に2つの「言語発達」に関する研究の「展望」がなされている。中島（1967）の「日本における言語発達研究の動向——乳幼児期を中心として——（「心理学評論」第10号）と，古浦・小林ら（1971）の「言語発達に関する最近の研究」（「教育心理学年報」第11集）がそれである。ところが，これらのどこを探しても，幼児期の読み・書きの発達に関する研究は見い出せない。古浦・小林らは，「過去10年間における内外の研究について，一応ほとんどの分野をカバーしている」と述べているが，本稿ですでに明らかにしてきたように，1970年頃には，わが国では幼児の読み・書き能力の発達に関する実態調査が盛んに行なわれていたし，幼児

の読みに関する研究も公刊されていたのである。

その後，「児童心理学の進歩」(Vol. XVI) に高木 (1977) によって，初めて「読み」が1つの独立領域として取り上げられ，さらに福沢ら (1979) によって，「教育心理学年報」(第18集) の「幼児の言語獲得に関する研究の動向」に，「文字言語の習得」の項が設けられた。ここに至って，幼児期の Written Language，すなわち“文字で書かれたことば”，“文字で書くことば”の発達が，言語発達の1分野としてようやく“認知”されることとなったのである。

結び——今後の発展のために——

以上，本稿では1947年より1979年まで，過去33年間の「かな」の読み・書きに関する心理学的研究を概観し，まず全体的な傾向や特徴を明らかにした。次に主要な研究分野について，これまでの研究成果を紹介するとともに，一部の研究については，研究方法等に関する問題点を指摘しつつ，今後取り組むべき研究の方向をも示してきた。

最初に述べたように，文字は，あくまでも言語的記号であり，人間の読み・書きは，通常文字を媒介として行なわれる一連の言語活動である。これを子どもの発達の面からとらえるならば，いかなる文字体系をもつ国の子どもであろうと，まず①“文字を見る”段階に始まり，次に②“文字を読む”，あるいは“文字を書く”段階を経て，最後は③“文字で読む”，“文字で書く”段階へと発達していくに違いない。それは，まぎれもなく，彼らの認知・思考・感情・運動能力などの諸発達と密接に連関し合った言語発達の過程である。従来の文字の知覚研究，読み・書きの発達研究，文字指導論の多くは，①の存在にはほとんど目を向けず，また③へのアプローチを軽視して，②の研究に重点を置き過ぎてはいなかったろうか。

そのような反省を踏まえて，最後に，今後われわれ心理学研究者が取り組むべき読み・書きに関する課題を掲げ，稿を終ることにしたい。

(1)ことばの表記媒体としての文字の特性や機能の分析。

(2)文字という媒体を用いた人間の言語的理解行為＝読みと，言語的表現行為＝書きの基本的機構・過程の解明。

(3)乳幼児のことばの発達の中で，文字獲得の果たす意義・役割の探究。

(4)ことばの教育における，特に初学者や障害児に対する系統的・計画的な読み・書き指導のあり方・内容・方法の検討。

なお，本稿では表2の(2)に示した国語学・言語学関係の文献についても紹介するつもりであったが，今回は紙数に余裕がなくなった。稿末に，文字論に関するものを「参考文献」として一部載せておいたので，ご参照いただきたい。

引用文献

(1) 天野清　語の音韻構造の分析行為の形成とかな文字の読みの指導　教育心理学研究第18巻第2号　1970　12—25.

(2) 天野清　語の音韻構造の分析行為の形成とかな文字の教授・学習——特に就学前児を対象とした長音の自覚の形成とその読み・表記の学習——日本教育心理学会第20回総会発表論文集　1978　666—667

(3) 荒木茂　国語教育・1年生　あゆみ出版　1975.

(4) 浅場慶夫・新井久子・粕谷翠・関口準　幼児の言語能力の実態——5歳児の読字力に関する研究——日本保育学会第23回大会研究論文集 1970　225—226.

○Fröbel, F.W.・荘田雅子(訳) リナはどうやって文字を覚えたか　1973. フレーベル館

(5) 藤野桂子・田中敏隆　文字読みの指導に関する一考察　関西心理学会第89回大会論文集　1977　20.

(6) 藤田恭平　幼児の文字指導　三省堂　1974.

(7) 藤田善正　文字認知の発達に関する研究 I　関西心理学会第87回大会論文集　1975　43.

(8) 藤原宏・瀬川栄志(編)　新学習指導要領の指導事例

集　小学校国語科・1　新しい「言語事項」の指導(1)発音・発声・文字・表記法　明治図書　1978.

(9) 福沢周亮　国語学習の心理学的研究(1)——入門期における読みの学習指導法——日本心理学会第23回大会発表論文集　1959　Ⅷ—30—1—2

(10) 福沢周亮　入門期における読みの学習指導法に関する実験的研究　東京教育大学大学院修士論文　1959.

(11) 福沢周亮　国語学習の心理学的研究(2)——ファミリア・ワードについて——日本心理学会第24回大会発表論文集　1961　239.

(12) 福沢周亮　幼児の言語　日本文化科学社　1970.

(13) 福沢周亮　国語教育に関する心理学的研究——読みの能力を中心として——教育心理学研究第21巻第1号　1973　56—61.

(14) 福沢周亮（編・著）　幼児の国語——その指導の実際　ひかりのくに　1975.

○福沢周亮　漢字の読字学習——その教育心理学的研究　学燈社　1976.

(15) 福沢周亮　ひらがなの学習指導に関する一考察　東京教育大学教育学部紀要第23号　1977　73—77.

(16) 福沢周亮　入門期についての考え方　教育調査研究所研究紀要第13号　1977　55—57.

(17) 福沢周亮・佐々木定夫　小学校1年生における言語化過程の分析　教育調査研究所研究紀要第16号　1979　149—183.

(18) 福沢周亮・高木和子・鈴木情一・守一男・堀啓造・茂呂雄二　幼児の言語獲得に関する研究の動向　教育心理学年報第18集　1979　100—119.

○Gibson, E.J. & Levin, H. The Psychology of Reading, MIT, 1975.

(19) 浜崎幸夫・登根健之助　園児に対するひらがな文字の一斉指導法　日本教育心理学会第16回総会発表論文集　1974　440—441.

(20) 浜崎幸夫・登根健之助　園児に対するひらがな文字の一斉指導法③　日本教育心理学会第17回総会発表論文集　1975　208—209.

(21) 浜崎幸夫・登根健之助　園児に対するひらがな文字の一斉指導法(4)　日本教育心理学会第18回総会発表論文集　1976　272—273.

(22) 浜崎幸夫・登根健之助　園児に対するひらがな文字の一斉指導法(5)　関西心理学会第88回大会論文集　1976　63.

(23) 浜崎幸夫・登根健之助　園児に対するひらがな文字の一斉指導法(6)　日本教育心理学会第19回総会発表論文集　1977　114—115.

(24) 浜崎幸夫・登根健之助　なぞり行動の発達的研究(1)(2)　日本保育学会第30回大会研究論文集　1977　161—162.

(25) 浜崎幸夫・登根健之助　なぞり行動の発達的研究(3)　日本保育学会第31回大会研究論文集　1978　212—213.

(26) 浜崎幸夫　なぞり行動の発達的研究(5)　日本教育心理学会第20回総会発表論文集　1978　76—77.

(27) 浜崎幸夫　言語発達の4つの路線——幼児の書きことばの発達——尚絅短大研究紀要第11輯　1978　29—37.

(28) 浜崎幸夫　幼児の書字習得過程——なぞり，視写，聴写プログラムと教示によるかな文字の習得——日本教育心理学会第21回総会発表論文集　1979　352—353.

(29) 浜崎幸夫　言語発達の4つの路線——幼児の書きことばの発達——日本保育学会第32回大会研究論文集　1979　388—389.

(30) 肥田野直　ローマ字および「かな」の可読閾の研究　教育心理学研究第2巻第3号　1954　169—186.

(31) 今井靖親・森岡裕子　幼児の書字行動に及ぼす指導法の効果　読書科学第21巻第1・2号　1977　14—22.

(32) 今井靖親　幼児の読字学習における指導法の検討——片仮名と漢字の学習難易度と絵の呈示効果——読書科学第23巻第4号　1979　97—104.

(33) 今井道子・今井靖親　幼稚園における文字環境の実態　日本保育学会第32回大会研究論文集　1979　386—387.

○今井靖親　読書の研究法(Ⅲ)——統制群法の原理と応用——読書科学第23巻第1号　1979　25—31.

(34) 今泉運平　ひらがなの学習指導　光風出版　1954.

(35) 井野朝二・鹿取広人・吉野公喜・宮地公枝　文字を媒介とする言語行動の形成2. 音声——文字言語の関係について　日本教育心理学会第13回総会発表論文集　1971　296—297.

(36) 井上尚美・宮腰賢　言語の研究　学芸図書 1977.

(37) 石川信一　幼児の読字力の発達に関する追跡的研究　保育学年報1969年版　1970　131—132.

(38) 石川県教育研究所　幼児教育に関する研究Ⅱ——就学前のひらがな理解に関する調査——研究紀要第39集　1970.

(39) 岩崎未弥子・黒田実郎　幼児期における「ひらがな」の読み書き能力に関する発達的研究　日本保育学会第28回大会研究論文集　1975　V—505.

(40) 岩崎未弥子　幼児の「かな文字」習得とその要因の検討　日本保育学会第29回大会研究論文集　1976　V—514.

(41) 岩崎未弥子　幼児の「かな文字」習得と幼小の関連　日本保育学会第30回大会研究論文集　1977　146.

(42) 亀井けい子　幼児の読み書きの能力について　保育学年報1962年版　1963　49—51.

○漢那憲治　読み聞かせの研究(Ⅱ)　日本読書学会第23回研究大会発表資料集　100.

(43) 柏原恵龍　幼児における鏡映的文字の書字と性差及び Lateral Preference　日本心理学会第43回大会発表論文集　1979　438.

(44) 河井芳文・井上智子・原夏絵　文字指導とレディネスの診断　日本教育心理学会第20回総会発表論文集　1978　584—589.

(45) 河井芳文・堀田修　文字指導のための読字力の診断　日本教育心理学会第21回総会発表論文集　1979　784—785.

(46) 岸井住子・亀井けい子・井上範子　幼稚園児の読み書き能力についての研究——書き調査を中心として——保育学年報1968年版　1969　101—103.

(47) 北原幸子・大沢次子・内海武二・古田克己・山本義男　児童・生徒の筆順上の問題点とその考察　第18回全日本小学校書写教育研究会東京大会研究集録　1978　62—75.

(48) 北尾倫彦　ひらがな文と漢字まじり文の読みやすさの比較研究　教育心理学研究第1巻第4号　1960　195—199.

(49) 小林芳郎　文字の認知に関する発達的研究——文字の認知と意味性について——日本教育心理学会第12回総会発表論文集　1970　174—175.

(50) 小林芳郎　文字の認知に関する発達的研究——ひらがな文字の認知について——大阪教育大学紀要第Ⅳ部門第20巻第2号　1971　127—137.

(51) 小林芳郎　文字の認知に関する発達的研究——因子分析によるひらがな文字の検討——大阪教育大学紀要第Ⅳ部門第26巻第2号　1977　103—114.

(52) 小石寛文　読書に関する一研究——文字を読むことと文章を読むことの差について——日本教育心理学会第17回総会発表論文集　1975　456—457.

(53) 小島潔　幼児のための言語教育の心理　学芸図書 1972.

(54) 国立国語研究所　入門期の言語能力　国立国語研究所報告7　1954.

(55) 国立国語研究所　読みの実験的研究——音読にあらわれた読みあやまりの分析——国立国語研究所報告9　1955.

(56) 国立国語研究所　幼児の読み書き能力　国立国語研究所報告45　1972.

(57) 近藤原理・中谷義人(編・著)　ちえ遅れの子どもの国語　1. ひらがな・単語篇　学習研究社　1978.

○古浦一郎・小林利宣　言語発達に関する最近の研究

教育心理学年報第11集　1971　77—118.

(58) 倉橋克　幼児の文字指導　金沢大学教育学部紀要第23号　1974　231—239.

(59) 倉沢栄吉(監修)・瀬川栄志(編) 国語科の授業計画 1年　国土社　1970.

(60) 倉沢栄吉(編) 国語わかる教え方　1年　国土社　1975.

(61) 栗原美智子　言語指導の理論と実践(2)——遊びの中で体系的文字指導を——日本保育学会第31回大会研究論文集　1978　442—443.

(62) 松原達哉・小林芳郎　かな文字の見やすさに関する研究　心理学研究第37巻第6号 1966　359—363.

(63) 松原達哉・岡田明　数・文字とその導き方　明治図書　1973.

(64) 松倉信濃　ひらがな文字の形と音韻の混同　日本教育心理学会第16回総会発表論文集　1974　438—439.

(65) 松本順之　児童のひらがなの習得について　日本心理学会第11回大会発表抄報（心理学会研究第19巻第3・4号 252）1947.

(66) 松本順之　国語教育の心理学的研究　新光閣書店　1960.

(67) 松村ひろ子・田中敏明・横山正幸　一幼児の文字の習得過程(その2)——特に表現内容について——日本保育学会第29回大会研究論文集　1976　V—511.

(68) 松尾沢幸恵　児童の書字行動の発達傾向に関する一考察　第18回全日本小学校書写教育研究会東京大会研究集録　1978　31—36.

(69) 松崎学・磯崎三喜年・上野徳美・古城和敬　幼児の読字学習における絵対提示の効果　日本教育心理学会第21回総会発表論文集　1979　774—775.

(70) 三神廣子　読書レディネス・テスト(1)——幼稚園で字を教えた場合と教えない場合——日本保育学会第25回大会研究論文集　1972　2—207.

(71) 三神廣子　読書レディネス——幼稚園での文字学習と小学校での国語学力の関係——日本教育心理学会第15回総会発表論文集　1973　90—91.

(72) 三神廣子　これからの保育内容——文字指導を中心にして——日本保育学会第26回大会研究論文集　1973　2—312.

(73) 三神廣子　読書レディネス——幼児期の文字指導と小学校での国語・算数学力の関係——日本教育心理学会第16回総会発表論文集　1974　178—179.

(74) 三神廣子　これからの保育内容——幼児期の文字指導について——日本保育学会第27回大会研究論文集　1974　1—509.

(75) 三神廣子・井上清子・乙部富代美　これからの保育内容(1)　日本保育学会第28回大会研究論文集　1975　V—507.

(76) 三神廣子・井上清子・乙部富代美　これからの保育内容(2)　日本保育学会第28回大会研究論文集　1975　V—508.

(77) 三神廣子　これからの保育内容——文字指導に関する日米の比較——日本保育学会第31回大会研究論文集　1978　446—447.

(78) 三木千勢　大阪府下保育所4，5歳児のかな文字習得の実態　日本保育学会第26回大会研究論文集　1973　2—308.

(79) 箕川裕子　幼児の日常生活における文字や数の発達と指導　その2——文字について——日本保育学会第32回大会研究論文集　1979　138—139.

(80) 三浦義雄　平仮名の学習に関する実験的研究　報告1——硬筆書字動作の質的方面について——日本心理学会第13回大会講演抄録（心理学研究第20巻第4号 48）1949.

(81) 水口芳明　幼稚園児の読書レディネスについて　日本心理学会第21回大会発表論文集　1958　387—388.

(82) 守一雄　就学前の文字指導　教育調査研究所研究紀要第13号　1977　50—54.

(83) 森重敏　幼児の文字学習とその指導の問題に関す

る一考察（序報）　日本保育学会第29回大会研究論文集　1976　V—515.

(84) 森重敏　幼児の文字学習とその指導の問題に関する一考察（第2報）　日本教育心理学会第19回総会発表論文集　1977　112—113.

(85) 森重敏　幼児の文字学習とその指導の問題に関する一考察（第3報）　日本保育学会第31回大会研究論文集　1978　448—449.

(86) 守屋光雄・釘宮冴子・田中由紀子　幼年期児童におけるひらがなの読み書き調査について　保育学年報1962年版　1963　51—52.

(87) 村田孝次　幼児の言語教育　朝倉書店　1973.

(88) 村田孝次　幼児の書きことば　培風館　1974.

(89) 村石昭三　幼稚園児のリテラシー　読書科学第4巻第1号　1959　24—31.

(90) 村石昭三　入学前のコトバと文字の指導　明治図書　1965.

(91) 村石昭三　ことば遊びの指導　すずき出版　1973.

(92) 村石昭三　幼児の筆順に関する教育心理学的研究　国立国語研究所論集5　1974　242—262.

(93) 村石昭三　ことばと文字の幼児教育　ひかりのくに　1974.

(94) 村石昭三　ことば遊び・文字遊び　小学館　1974.

(95) 村石昭三　育てる——ことばと文字　すずき出版　1976

○中島誠　日本における言語発達研究の動向——乳幼児期を中心として一心理学評論　1967　257—278.

(96) 中野佐三　文字学習の研究(2)——かな学習について——日本心理学会第19回大会発表論文集　1956　347—348.

(97) 中村悦子・秋場美智子・岩原陽子・小池栄子・川成智恵子・手塚久美子　就学前教育における教材の研究(1)　言語指導におけるワークブックの使用の実態と問題点（その1・その2）　日本保育学会第32回大会研究論文集　1979　84—87.

(98) 滑川道夫　文字教育の体系と方法　西尾実・時枝誠記監修・熊沢龍他編　国語教育のための国語講座第3巻　表記法の理論と教育　朝倉書店　1958　239—337.

(99) 奈良女子大学幼年教育研究会　幼児のことば遊びひかりのくに　1972.

○禰津和彦　書写・書道　辰野千寿・福沢周亮編著　教科学習の心理学　図書文化　170—192.

(100) 野呂アイ　幼児のかな文字の習得過程　日本保育学会第32回大会研究論文集　1979　384—385.

(101) 庭山繁子・大窪文子・窪田さつき・清水芳子・藤田政子・渡辺十四子・加藤京子　言語の習得状況とその環境＝山梨県保育所における調査に基づく＝日本保育学会第31回大会研究論文集 1978　436—437.

(102) 小保内虎夫・佐藤泰正　読み易さに関する二つの研究——文字構造と分ち書きについて——東京教育大学教育学部紀要第2号　1956　40—51.

(103) 岡直樹・森敏昭・柿木昇治　幼児の漢字と仮名文字の読みの学習　心理学研究第50巻第1号　1979　49—52.

(104) 岡田明　幼児の文字の認知の誤りについて　日本教育心理学会第12回総会発表論文集 1970　24—25.

(105) 岡田明　文字の認知の誤りについて（その2）　日本心理学会第35回大会発表論文集 1971 391-392.

(106) 岡田明　最新　読書の心理学　日本文化科学社　1973.

(107) 岡本奎六　書写力評定法に関する研究　日本教育心理学会第8回総会発表論文集　1966　282—283.

(108) 岡本奎六　講座　読みの言語心理(一)　児童心理第26巻第11号　1972　172—190, 同(二)第12号　1972　167—186.

(109) 岡本奎六　読みの心理言語学　読書科学第19巻第4号　1975　124—133.

(110) 大久保愛　幼児のことばとおとな　三省堂 1973.

(111) 大西誠一郎　新入学児童の文字学習　日本心理学会第26回大会発表論文集　1963　316.

(112) 榊原清　読書の心理　日本文化科学社　1953.

(113) 阪本一郎　国語学習の心理　金子書房　1953.

(114) 阪本一郎　読書の心理　牧書店　1955.

(115) 阪本一郎　読みと作文の心理　牧書店　1955.

(116) 阪本敬彦　読みやすさに関する研究——漢字表記とかな表記について——日本心理学会第23回大会発表論文集　1960　388.

(117) 阪本敬彦　縦書き文・横書き文の読みのスキルについて　日本教育心理学会第3回総会発表要旨（教育心理学年報第1集 105）　1961.

(118) 阪本敬彦　国語学習の心理(一)　児童心理第26巻第7号　1972　165—180, 同(二)　同8号 1972　211—228.

○Samuels, S.J. Attentional process in reading: The effect of pictures on the acquisition of reading responses, Journal of Educational Psychology, 58, 1967, 337—342.

(119) 佐々木定夫　教科書についての考え方　教育調査研究所研究紀要第13号　1977　58—64.

(120) 佐々木定夫・福沢周亮　小学校1年用　国語教科書（教育出版発行）の語句を中心とした分析　教育調査研究所研究紀要第16号　1979　149—183.

(121) 佐藤もと子　幼稚園児の書字能力について　日本教育心理学会第16回総会発表論文集　1974　182—183.

(122) 滋賀県教育研究所　就学前の文字の読みに関する研究　教育研究所紀要第11集　1969.

(123) 清水たみ子　幼児のことばと文字　さ・え・ら書房　1976.

○Smith, F. Understanding Reading: A Psycholinguistic analysis of reading and learning to read. Holt, Rinehart and Winston, 1971.

○Smith, F. Psycholinguistics and Reading, Holt, Rinehert and Winston, 1973.

(124) Steinberg, D.D.・山田純　読字学習の原理と方法　心理学評論第20巻第2号　1977　61—81.

(125) Steinberg, D.D.・岡直樹　漢字とかな文字に関する読みの学習——漢字学習の相対的容易さについて——日本心理学会第41回大会発表論文集　1977　662—663.

(126) Steinberg, D.D.・Yamada・Nakano・Hirakawa & Kanemoto Meaning and the Learning of Kanji and Kana, Hiroshima Forum for Psychology, No.4　1977, 15—24.

(127) Steinberg, D.D.・岡直樹　漢字と仮名文字の読みの学習——漢字学習の易しさについて——心理学研究第49巻第1号　1978　15—21.

(128) Steinberg, D.D. & Yamada, J. Pigs will be chikens: reply to Tzeng and Singer, Reading Research Quarterly, Vol. 14, No.4, 1978—1979, 668—671.

(129) 須田清　かな文字の教え方　麦書房　1967.

(130) 須賀哲夫・大竹信子　書記指令行動について——事例研究——教育心理学研究第20巻第4号　1972　12—21.

(131) 菅俊夫・登根健之助・浜崎幸夫　園児の文字習得と言語環境(2)　日本保育学会第29回大会研究論文集　1967　V—513.

(132) 杉村健　幼児における単語の読みの学習　教育心理学研究第22巻第4号　1974　34—38.

(133) 杉村健・久保光雄　文字の読字学習に及ぼす弁別訓練の促進効果　教育心理学研究第23巻第4号　1975　8—14.

(134) 薄田司　読みの早期指導の問題　金沢大学教育学部紀要第18号　1969　71—86.

(135) 鈴木信政・竹内通夫　幼稚園における文字指導　日本保育学会第30回大会研究論文集　1977　147.

(136) 鈴木信政・竹内通夫　幼稚園における文字指導について(2)　日本保育学会第31回大会研究論文集　1978　444—445.

(137) 首藤久義　絵本の表記法に関する検討と提案——幼児の読みの学習過程に即して——人文科教育研究 I　1975　44—57.

(138) 首藤久義　「読み」の学習と教育——メソッドの統合の視点——日本語の表記体系と子どもの学習・発達過程に即して　読書科学第19巻第3号　1975　69—85.

(139) 首藤久義　文字教育に関する研究——小学生の書き取り能力調査の結果とその分析，解釈ならびに教育論的考察——人文科教育研究Ⅲ　1976　1—16.

(140) 首藤久義　入門期かな文字指導法略史および文献解説　教育調査研究所研究紀要第13号　1977　65—70.

(141) 田井中秀嗣　漢字混り文とひらがな文——筆写時間による検討——日本心理学会第43回大会発表論文集　1979　365.

(142) 田川元康　精薄児のかな文字学習についての一考察　日本教育心理学会第5回総会発表要旨（教育心理学年報第3集 73）1962.

(143) 高木和子　読み　児童心理学の進歩第16巻　金子書房　1977　150—170.

(144) 田村陽子　幼児の文字学習について　日本保育学会年報1963年版　1964　52—53.

(145) 田中寛一・鈴木清・品川不二郎　カナとローマ字の読みの能率について　日本心理学会第13回大会講演抄録（心理学研究第20巻第4号 47）1949.

(146) 田中寛一・金井達蔵・間宮武・鈴木清　カナとローマ字の読みの能率に関する実験的研究　日本心理学会第15回大会講演抄録（心理学研究第21巻第3・4号 88）1951.

○田中敏隆　図形認知の発達心理学　講談社　1967.

(147) 田中敏隆・岩崎純子・三木千勢　文字認知に関する発達的研究　日本心理学会第36回大会発表論文集　1972　366—367.

(148) 田中敏隆・岩崎純子・三木千勢　文字認知に関する発達的研究(3)　日本心理学会第37回大会発表論文集　1973　254—255.

(149) 田中敏隆・岩崎純子・三木千勢　文字認知に関する発達Ⅰ　心理学研究第45巻第1号　1974　37—45.

(150) 田中敏隆・岩崎純子　文字認知に関する発達的研究(Ⅴ)　日本心理学会第38回大会発表論文集 1974　570—571.

(151) 田中敏隆・安福純子　文字認知に関する発達的研究(6)　日本心理学会第39回大会発表論文集　1975　339—340.

(152) 田中敏隆・藤田善正　文字認知に関する発達的研究(8)　日本教育心理学会第18回総会発表論文集　1976　200—201.

(153) 田中敏隆・安福純子　文字認知に関する発達的研究(9)　日本心理学会第40回大会発表論文集　1976　841—842.

(154) 田中敏隆　文字認知に関する発達　心理学研究第48巻第1号　1977　49—53.

(155) 丹野眞智俊　幼児の読字能力の発達　日本教育心理学会第13回総会発表論文集　1971　136—137.

(156) 東條吉邦　暗算時，言語心像想起時，および視覚心像想起時の脳波の左右差　心理学研究第49巻第5号　1978　288—291.

(157) 富田達彦・三島二郎　新入学児童のかな文字習得過程の研究　日本教育心理学会第1回総会発表要旨（教育心理学研究第7巻第4号 67）1959.

(158) 登根健之助・福山和明・浜崎幸夫　なぞり行動の発達(4)——用具および地域差の検討　日本保育学会第31回大会研究論文集　1978　214—215.

(159) 土山汀・牧浦浩子　文字指導からみた言語生活(1)(2)　日本保育学会第28回大会研究論文集　1975　X—1004～1005.

(160) 辻西昭二・白川信也　読み書きの学習開始に必要な知覚能力の実験的研究(1)　日本教育心理学会第20回総会発表論文集　1978　90—91.

(161) Tzeng, O.J.L. & Singer, H. Failure of Steinberg and Yamada to demonstrate superiority of Kanji over Kana for initial reading instructions in Japan, Reading Research Quarterly, Vol. 14, No.4, 1978—1979, 660—667.

(162) 上田哲世・黒田実郎　幼児の「書きのレディネス」に関する研究　日本保育学会第32回大会研究論文集 1979　390—391.

(163) 若林節子・北原美恵子　言語音に対応する文字を書く過程の分析——2音節語に関して——教育心理学研究第26巻第4号　1978　21—28.

(164) 山田麗子・井野朝二・鹿取広人　文字を媒介とする言語行動の形成1. 文字習得の過程について　日本教育心理学会第13回総会発表論文集 1971　294—295.

(165) 山田麗子・井野朝二・鹿取広人　文字を媒介とする言語行動の形成——文字習得過程について（その2）——日本教育心理学会第15回総会発表論文集 1973　340—341.

(166) 山下俊郎（監修）言語と数　幼児教育学全集第4巻　小学館　1971.

(167) 幼児言語研究会　幼児のことば教育入門——保育者のための理論と実際——一光社　1977.

(168) 横地清　幼児のよみかき——考える力を育てる——誠文堂　1966.

(169) 横地清　こどもにことばと文字を教える　布井書房　1972.

(170) 横地清・多湖輝・中沢和子・塩川寿平　討論幼児教育　文字と数は教えるべきか　日本放送出版協会 1978.

(171) 横地清（編・著）言語と文字　中教出版　1978.

(172) 横山正幸　書きことばの発達に関する一研究　日本教育心理学会第12回総会発表論文集　1970　90—91.

参考文献

○林大・林四郎・森岡健二（編）現代作文講座6・文字と表記　明治書院　1977.

○樺島忠夫　日本の文字——表記体系を考える——岩波書店　1979.

○小泉保　日本語の正書法　大修館書店　1978.

○小松茂美　かな——その成立と変遷——岩波書店 1968.

○西尾実・時枝誠記（監修）国語教育のための国語講座3・表記法の理論と教育　朝倉書店　1958.

○野元菊雄・野林正路（監修）日本語と文化・社会1・ことばと心理　三省堂　1977.

○大野晋・柴田武（編）岩波講座　日本語8・文字　岩波書店　1977.

○柴田武・森岡健二（司会）シンポジウム日本語4・日本語の文字　学生社　1975.

○塩田紀和　日本の文字とことば　国土社　1970.

SUMMARY

This article presents a review of the previous research on reading and writing Hiragana and Katakana, the two Japanese syllabaries which are taught in the early elementary grades in Japan. The studies published between 1947 and 1979, appearing in 172 papers and books on reading and writing Kana, were reviewed. Their content was classified into eight categories as follows: 1. Perception or recognition of characters, 2. Mechanics or process of reading, 3. Factors influencing reading ability, 4. Methods in teaching reading, 5. Writing Kana characters, 6. Development of ability in reading and writing Kana, 7. General books on studies of reading and writing Kana, and 8. Reviews of research on reading and writing Kana.

The changes in the numbers and contents of studies which occurred during these years were examined. The main research was identified in each area and faulty methods or conclusions of particular studies were critiqued.

The Science of Reading, Vo. 24, No. 3 (1980)

漫画の理論
——記号論的アプローチ——*

沖縄キリスト教短期大学
大城宜武**

問題

「漫画のすさまじい人気は，しばしば畏敬の念に近いものを呼び起す」と，ホグベン（1979）は述べている（p.230）。1940年代のアメリカでの話である。この評言は，現今の日本にもあてはまる。副田（1976）によると，「50年代後半から現在に至る期間で，わが国のマス・カルチャーにおいては，映画→テレビ→マンガというメディアの系列が見出される。映画→テレビは主役の交替である。テレビ→マンガは主役としての登場の順序である」（p.8）とされる。主役としての漫画の歩みは着実である。全出版物における漫画関連部門の発行点数や発行部数は，増加の一途を辿っている，ことはしばしば指摘されているとおりである（cf. 総理府青少年対策本部，1977，1979，出版年鑑編集部1979）。漫画のこの厖大な出版に伴う読者の存在はいうまでもないであろう。小・中学生を対象にした調査によると（『青少年白書昭和54年版』）

マンガの読み方を見ると，高学年になるほど，また，女子より男子が，積極的であるという傾向が示されている（p.104）

高校生の雑誌購読の調査結果を見ると，「20年前には，男女ともに高校生向け学習雑誌と新聞社発行の週刊誌が上位を占めていたが，現在（1976年——引用者注）では，男女ともマンガ雑誌が上位に並んでいる（『青少年白書昭和52年版』p.76）。さらに，男子大学生を対象とした調査では：

マンガ週刊誌を「読まない」という者は4割弱で，6割の者は1週間に1回以上読んでいる（同上，p.245）

と報告されている。

ホグベンが「漫画は批判と攻撃と侮辱の中でますます隆盛になった」（p.245）と適切に指摘しているように，漫画隆盛への道は，なめらかではなかった。（cf. Zorbaugh, H, 1944）。ホグベンによると，漫画が批判にさらされた理由の1つは，次のようなものである；

漫画が問題になるのは，それが印刷された言葉の競争者として，絵画のもつ驚くべき大衆性をもっているからである。そうして，今日でも学校教育が大部分，教材として印刷された言葉，あるいは話し言葉に頼っているから，漫画がそれに対して大きな競争者として現われたのである（pp. 249-250）。

日本でも状況は似たようなものである。副田（1972）は，漫画への批判を7つの大罪として要約している；すなわち漫画を読むと，

1. 悪いことばを覚える
2. 残酷さにひかれる
3. 醜いものにひかれる
4. 性への好奇心をあおられる
5. 本を読まなくなる
6. 勉強をしなくなる，そして
7. ものを考えなくなる（pp. 52-57）

というものである。副田は，これら，一つ一つに対して

* Toward the semiology of comic strips.

** OSHIRO, Yoshitake (Okinawa Christian Junior College)

反論を試みていた。それにもかかわらず，同様な理由でもって漫画を指弾する論者は後をたたないようである（cf. 松沢1979，紀田1977など）。

ところで，ベラ・バラージュ（1976）は，漫画ではなく，映画について次のように述べていた；

映画芸術は，他のいかなる芸術よりも一般大衆の心を大きく左右する力をもっている。このことは，われわれすべてが知り，かつ認めているところである。（中略）しかしながら，そこから映画についてある程度の知識（傍点は原著者によるものである。特に断わらない限り，以下同じ）をもつ必要が生じるということについては，誰も認めようとしない。われわれの時代のもっとも独自な，もっと大きな精神的影響力をもつ映画によって，あたかも盲目的で抗し難い自然力によってのように，意のままに左右されないために，われわれは映画に対して専門的な知識をもち，方向と規準をつかんでいなければならない（p.12）。

現在の漫画の状況は，上の引用文中，「映画」を「漫画」に置き換えて見ることによって，理解しやすくなるであろう。バラージュは，また，次のようにも述べていた；

必要なのは，すでに出来上ったものを受身に享受する鑑賞でなく，高く飛翔し，自ら要求をつきつける創造的鑑賞である。それだから，映画には，理論的知識と美学が必要なのである。既往の芸術的作品から理論を導き出すかわりに，作品を予見的に企画し，促進し，期待する美学がである（p.14）。

やはり「映画」を「漫画」と読みかえると，ここで求められているのは，「漫画の美学」であり，「漫画の理論」である。漫画を擁護するにしろ，拒否するにしろ，いったい漫画について，われわれは，何を，どの程度知っているか，または，知らないかを，把握する必要がある，と考える。

漫画を対象とする評論や研究がかなりの数発表されている。しかしながら，未だ印象批判の域を出ない段階のようである。磯貝（1980）は，漫画研究のこのような状況を次のように要約している；

……しかしこうしたマンガ評論は作家論あるいは作品論が多く，それとの関連でマンガ読者およびそれらをめぐる社会状況に触れている。鋭い洞察を示してはくれるけれども，評者自身の思想が強く前面に出ていて，必ずしも実証的・客観的なマンガ研究ではない。むしろマンガ評論を通して評者の考え方を教えられるのである（p.19）。

このことを，中野（1980）によって，さらに敷衍する；

漫画論という現代文化論のジャンルがある。驚くほど多くのことが語られている。（中略）漫画論で面白いのは，著者たちが，深読み，裏読みに夢中になっている光景である。（中略）しかし，ぼくが興味をひかれるのは，漫画論の著者たちの思い入れの強烈さと漫画と日常的に接触している小・中・高校生・大学生，若者たちのクールさとの対照（コントラスト）である（p.105）。

漫画の読み方に，いわゆる大人と若い世代との間には差異のあることが述べられている。そして，福富（1977）の次の指摘は正確である；

重要なことは，大人がマンガを読む現代青年を理解しようとする場合にマンガに対する基本的な枠組みが違うかもしれないということを認識することである（p.143）。

Langer（1953）は哲学の果すべき役割を，次のように規定している；

われわれが何かを主題にして論じる場合（この場合は芸術）に使用する用語に，定義と適切な意味を付与し，諸概念を解明し，有機的に組織化すること，が哲学の任務である，すなわち，C.パースが，「われわれの観念を明晰にすること」である，と述べたのと同じように，（p.vii）。

ランガーのこの考え方に従って，本稿の目的は，漫画を研究する上での共通理解の形成をめざして，漫画表現の特質についていくつかの前提を理論，仮説または定義の形で提案することである。まず，仮説と定義の系をあげ，次いで，個々の問題を論じることにする。

理論仮説の系

〔仮説1〕

漫画は記号である

〔仮説2〕

漫画の表現は描画・表言（picto-verbal）的である

〔仮説3〕

漫画の表現は時間的・空間的要因で構成される

〔仮説4〕

漫画表現の空間的要因は，二次元平面における線描による形象を荷う

〔仮説5〕

漫画表現の時間的要因は，①吹き出し（name）を中心とする言辞連鎖と，②コマ（section）の連なり（sequence）の描画連鎖の，線的・継続的表現を荷う

〔仮説6〕

漫画の表現は線描的に構成される

〔仮説7〕

漫画は動き（motion）と音響（sound）を表現する

〔仮説8〕

漫画の表現する動きと音響とは，オノマトペによって強化される

〔仮説9〕

漫画表現の伝達媒体は印刷媒体である

〔仮説10〕

漫画表現は漫画媒体（media）である

〔仮説11〕

漫画表現は意味を伝達する

〔仮説12〕

漫画伝達は，送り手，受け手，漫画記号，意味，対象，伝達媒体の6要素で構成される

〔定義1〕

漫画，まんが，マンガ，コミック，劇画など種々の呼び名があるが，記号としての漫画を，「漫画記号」または「漫画言語」あるいは，単に「漫画」と呼ぶ

〔定義2〕

漫画表現の構成要素である絵画の部分を，「描画」と呼び，吹き出し中の文や説明などの自然言語を「言辞」と呼ぶ

〔定義3〕

漫画記号を創作あるいは製作することを記号化（encoding）と呼ぶ。この記号化に携る者を，漫画家または送り手（addresser）と呼ぶ

〔定義4〕

漫画家によって創作・製作された漫画記号を「漫画作品」または，単に「漫画」と呼ぶ

〔定義5〕

漫画作品を享受し，解読することを復号化(decoding)と呼ぶ。複合化に携る者を読者，または受け手（addressee）と呼ぶ

〔定義6〕

漫画記号が表象し，シグナルし，センスし，そして指示する機能を「意味機能」または単に「意味」と呼ぶ。また，意味される，概念，行動，情感，もの，などを「対象」と呼ぶ

1. 漫画記号

漫画は記号である。漫画は1つの記号体系を構成している。また，漫画は芸術である。佐藤（1973）は，「まんがは芸術の一つであることはわかりきったこと」(p.339)である，と述べていた。かつて，マルタン（1975）は映画について，「映画が芸術であるかどうかということは，いまさら大真面目に論議するような事柄ではない」(p.1)としたが，このことは漫画についてもあてはまる。

本稿は，漫画を一つの「芸術記号」として定式化する。近年，芸術を記号として見る考え方は一般的になりつつある（cf. Langer 1954, 1953, 竹内1975, 金城・大城1975, ペンスキー1979, 川野1972)。

漫画の実作者である手塚（1979）は，インタヴューに答えて，彼の漫画が記号である，と述べている；

……だから，それは表現の手段としてね，たまたまお話を作る道具として画らしきものは描いています

けど，僕にとってあれは画じゃないんじゃないかと，本当に最近思い出したんです。

じゃあ何かっていうとね，象形文字みたいなものじゃないかと思う。

そう，パターンがあるのね。つまり，一つの記号なんだと思う。で，このパターンとこのパターンとこのパターンを組み合わせると，一つのまとまった画らしさをもつものができる。その組み合わせのパターンというのはね，僕の頭の中に何百通りってあるわけです。だけどそれは純粋の絵画じゃなくてね，非常に省略しきった一つの記号なのだと思う。

つまり，僕にとってのまんがというのは表現手段の符帳にしかすぎなくて，実際には僕は画いているんじゃなくて，ある特殊な文字で話を書いているんじゃないかという気がする（p.43）。

本稿の主旨とは微妙に異なる点はあるにせよ，大筋では，手塚は彼の描く作品を「記号」とみなしている，といってさしつかえなかろう。漫画が記号であることの指摘は，すでに Spiegelman ら（1953）の研究に認められる。

Langer（1954）は，記号（シンボル）を大きく，①論弁的シンボル（discursive symbol）と，②非論弁的シンボル，または現示的シンボル（non-discursive symbol, presentational symbol）に区分している。論弁的シンボルの代表例は言語（自然言語）である。また，現示的シンボルは，絵画や音楽などが例示できる。ただし，注意したいのは，現示的シンボルがすべて「芸術的意味」を荷うのではない。ランガーによれば「多くの現示的シンボルは，単に論述の代用物であるにすぎない」（p.211）とされる。論述の代用物であるような現示的シンボルは言語化が可能である。これに対して現示的シンボルでも「芸術的シンボルは翻訳できない」（同上）のである。論弁的シンボルが芸術の素材になることがある。たとえば詩である。「詩の素材は論弁的であるが，作品としての詩，すなわちその芸術的現象は論弁的ではない」（pp. 212—213）。漫画記号の基本的特徴は，上に述べた，論弁性と現示性を同時に具備していることである。これは後に検討するように，きわめて重要な漫画の特質である。

大城（1975）は，人間が記号を作成し，使用する場合における観点から，記号の四項構造モデルを提案している。4つの項とは，「概念」，「行動」，「情感」，そして「もの」である。記号は，それぞれの項に対応して4つの機能をもつとされる。要約して示せば，記号は概念を表象し，行動をシグナルし，情感をセンスし，ものを指示する（pp.68—69）。記号の四項構造モデルの概念図を次に掲げる；

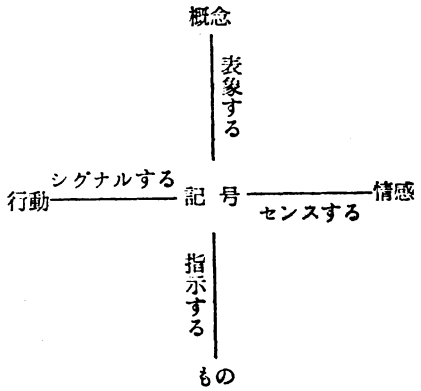

図 1　記号の四項構造モデル

本稿との関連でいえば，図1の「記号」は，漫画と読みかえて理解されることになる。つまり，漫画は4つの項をもち，4つの機能（意味）をもつと定義され得る。漫画を記号とみなして，漫画を研究することは「漫画記号論」の成立を予感させるであろう。

近年の記号学は，記号そのものの解明に加えて，文化現象としての記号に関心を向けつつある。この傾向は，特にロシヤ，タルトウグループにおいて顕著である。このグループの記号学は「文化記号学」と呼ばれる。このグループの「テーゼ集」は次のような前提をおくことで文化の記号学的研究を開始する；

文化を研究するときの，最初の前提は，情報の処理，交換，蓄積に関するあらゆる人間的活動は，しかるべき統一をもっているということである（ウイナー

and ウイナー，1978，p.114の引用による）

磯谷（1977）は，「文化」を「社会の諸言語および諸記号体系の階層構造である」(p.21）と定義している。漫画はすぐれて，文化現象の1つである。文化記号学の1つの分枝に漫画記号論は位置づけられるだろう。そして，漫画記号体系の研究は，記号体系研究の視点からすれば，イワーノフ（1977）の主張するように「人間を解明するための基本的な方法のひとつだ」（p.31）といえよう。

2. 漫画形式

漫画は，絵と言葉によって同時的かつ相補的に表現される。飯沢（1978）は，漫画について論じる者が，物語いわば言語の部分のみを重視し，絵画部を等閑に付していることに対して警告を発している（pp.192—193)。絵のみ，または，ことばのみの漫画はすでに漫画とはいえない。石子（1979）は「どのようなストーリーによって展開されようと，マンガは，まず絵と言葉によって表現されるのであって，独自な表現の論理と構造をもっているはずだ」（p.24）としていた。

漫画が描画・表言的に表現されるということは，きわめて重大である。北岡（1980）は，「文化の構造・知の構造」について述べる中で；

「人間の知に固有の特徴」を，とりわけ，「知の働きの核心」をなす「創造的思考」なるものを，包括的にとらえ，そのメカニズムの明示的なモデルを組み立てるため(p.83)，

の作業として，次のような視座を提案している；

一方で，大脳左半球の管理にかかわる自然言語や論理言語などのディジタル言語，それらも，もちろん，含めはしますが，それらだけではなく，右半球によって処理される，「絵画作品の言語」や「音楽言語」，「無意識の言語」などのようなアナログ言語をも含め，さらに，そのうえ，これら両種（ディジタル／アナログ）の言語の「混血」ともいうべき，詩的言語や「映画言語」，絵巻物や絵本，劇画などの「記号体系」にまで，つまりは，文化の「中心部」だけではなく，その「周辺部」にまで，考察の対象を広げるということ（pp.82—83)。

さらに，北岡によると，「幸い，こうした方向をめざしての両種（ディジタル／アナログ）の言語（記号体系）の再構成の試みは，すでに，かなりの成果をあげております。また，これら両種の言語（対象言語）を記述するためのさまざまなメタ言語の構築も，すでに試みられてきております」（p.83）という。

すでに見たように，漫画は論弁性と現示性の両特性を備えていた。論弁性の側面はディジタル言語に，現示性の側面はアナログ言語に対応させて考えることができる。つまり，漫画記号の描画は，アナログ言語に，表言

表 1 アナログ情報とディジタル情報の特性

〔アナログ情報〕	〔ディジタル情報〕
a．計　量　的	a．計　数　的
b．情報精度は低い	b．情報精度は高い
c．相対的に幅をもった連続量	c．一義的に不連続量
d．広がり，ないしボケ範囲をもつ	d．原則としてボケや広がりをもたない
e．どちらかというと幾何的な性格をもつ（図表的）	e．どちらかというと代数的な性格をもつ（数表的）
f．二，三次元への広がりをもった現象の大摑みに適す（全体的把握に適す）	f．一次元時間現象を正確に記述するに適す（部分のディテールを正確に処理したりするに適す）
g．定　性　的	g．定　量　的
h．図型認識的性格が強い	h．論理演算的性格が強い

はディジタル言語に対応させて考えることができる。漫画は「アナログ／ディジタル」言語である，というにほかならない。アナログ情報とディジタル情報の諸特質を市川（1978）の整理に従って表1に掲げる（pp. 168—169)。

モシデェ（Mosidze, V. 1978）を引用しながらの，人間の大脳の情報処理に関する北岡の説明を引用する；

ここで，人間の大脳の，左・右両半球の機能上の非対称という問題に関する，最近の神経科学の研究成果に眼を転ずると，大脳の「左半球が，言語機能と数理〔論理〕機能に関して，優位にあるとすれば，右半球の方は，空間の〔具体的な〕知覚，トポグラフィックな相互関係の知覚で，優越した役割を果し，「音楽能力も，同じく，右半球の機能によって決定されている」（モシデェ），ということが明らかにされております（p.79)。

この記述から示唆されることは，漫画の「読み」したがって漫画情報処理には，大脳の左・右両半球の機能が同等の重みをもって要請される，という点である。そして，漫画言語がアナログ／ディジタル型であることは，神経記号論的には，大脳の左・右両半球の機能を包括した，情報処理モデルを構築するのに有利な特性である，とみなし得る。したがって，漫画記号論は，情報処理の総合モデルまたは「知の働き」の総合モデルの構築にとって有効性をもち得ることになるのである。

大脳両半球の言語機能の概念モデルは，たとえば図2のように表わされる（北岡，p.100)；

この図を北岡は次のように説明している；

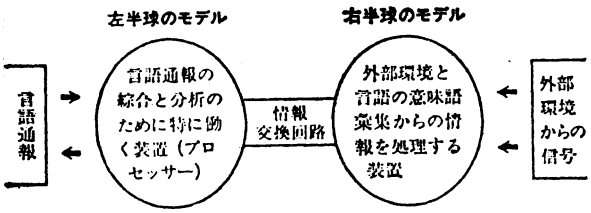

図 2　大脳両半球の言語機能のモデル
（イワーノフ，1978による）

外部世界に関して感覚がとらえた印象を，右半球が意味情報へと処理・加工する（「強い意味部門」)，その結果を，左半球が，脳梁を介して受け取る，右半球から得たこの意味情報を左半球が「左半球の文法」（と「弱い意味部門」）を「変換装置」として用いることによって，テクストに変換する（p.80)。

このことを，漫画情報処理に適用してみる。漫画の表言的側面は，直接「左半球」のモデルで処理される。そして，描画の知覚は，「右半球」で意味・処理・加工され，次いで左半球に伝えられる。ここで先の描画情報は意味変換され，テクストに組み込まれる，であろう。実際には，漫画情報の処理，したがって漫画の読みにおいて，大脳両半球で，何が起っているか，今のところ不明である。そしていうまでもなく，上述の言語機能モデルもきわめて単純化したものである。しかし，このような粗雑なスケッチからでも，漫画記号のもつ描画・表言特性の特異性については，いくらかの理解が得られるものと考える。

次に，漫画表現の時間的・空間的特性について述べることにする。まず空間的側面から取り上げる。

漫画の描かれる漫画空間は，映画におけるスクリーンやテレビにおけるブラウン管に端があるように，一定の大きさの紙幅という境界を有する。この紙幅は，コマ分割によって，さらに細かく境界づけられる。境界づけられた1コマ1コマには物象や心象が絵画として形象化される。人物や風物の一連の動きの一瞬のストップ・モーションが描かれる。漫画平面上で，これらコマは縦横に展開する。漫画の「一ページはさまざまな記号からなる＜記号空間＞である」とは上野の評言である（p.108)。コマはコマ割りによって，どこまでも延びようとするアナログ特性を仕切る。枠取りによって漫画の表現単位が固定される。各々のコマは，一定の意味境界をもって相互に独立している。それは完結した形象である。しかし，単に独立しているのではなく，相互に有意味な連なり，つまり，シークエンスを構成するような完結の仕方である。ちょうど1

つの文の中で，個々の単語が，相互に意味領域を限定，保持しながら，全体としてある種のメッセージを荷うように，個々のコマも，そのようなものとして漫画を構成している。コマのシークエンスが文のアナロジーとして説明されることから予想されるように，アナログ言語としてのコマの描画は，コマとコマが連なることによって，時間的要素を獲得するようになる。ディジタル化したのである。

通常，1つのコマの中には，吹き出しが描き込まれ，その中に言辞が書き込まれる。この言辞はいうまでもなくディジタル言語である。ディジタル言語の特性の1つは，時間的であることであった。1つのコマのコンテキストの中で，この言辞は述べられる。各コマごとの言辞は，また，コマからコマへのシークエンスに伴って連接し，大きく漫画テキストを構成していく。

なお，コマ内の表言は，吹き出し中の他に，モノローグや作者のナレーションなどとして書かれることもある。

このような漫画記号の時間的・空間的特性は，また漫画が「ディジタル／アナログ」言語であるということから由来するものである。あるいは逆に，時間・空間的特性をもつがゆえに，「ディジタル／アナログ」言語たり得るともいえよう。

漫画の原画（オリジナル）は，まず手描きによる線描として作製される。そしてこの原画は印刷という複製技術の操作を経て一般に伝達・流布される。漫画は複製を通して受容される。石子（1979）は「マンガを複製作品としてとらえる」と主張していた（p.23）。また，「マンガというからには，どのような技術によるにせよ，一定量が複製され，流布されることによってマンガである」（p.24）とも述べている。確かに「マンガは，固有の方法論をもった表現メディアである」（中島 1978, p.252）のだが，この「複製」することを前提とする創造・表現行為は，大きな制約を受けることになる。また，この制約のために，漫画は表現努力として数多の表現技法を開発してきてもいる。印刷複製を前提とする漫画オリジナルの創造・製作は，「版下」の作製と別物でなくなる。みなもと（1980）は，この間の事情を次のように述べている；

カラーや二色ページはさておきます。

漫画家は活版一色刷りを通して，読者に作品を提供せねばならぬ宿命があります。基本的には手にもつのはペンです。絵の具は黒インクもしくは墨汁です。

黒いモノを白い平面に圧着させるのが，漫画家の限られた表現方式なのです。

道具を選ぶ権利がない。これでは「絵画」とは呼べません。私も含めてマンガ家達が，日夜せっせと作り上げているものは，印刷用語でいうところの……「版下」というものであります（p.288）。

マンガが版下であってもよい訳は絶対にないのだ（p.290）。

みなもとは，「絵画（えか）きとはその表現手段として，素材を自由に選ぶ権利がある筈です」（p.288）とも語っている。また，

ペンを使わせなくたって，鉛筆で描かせりゃよいじゃないか。鉛筆の線を見事に複製することが印刷する側の努めではないのか（p.289）。

との，みなもとの発言は，漫画が複製されることを前提とする表現形式であることを明白に物語っている。

いずれにしても，漫画は線描されることによって存在する。それは，いわば無から有を生ずる試みである。これが，写真や映画，そして，テレビと異なる，漫画の特質である。写真・映画・テレビは，表現，伝達対象を（カメラ）レンズを通して映し撮ることによって存在する。映された対象が「映像」と呼ばれるものである。

3. 漫画表現

漫画メディアは視覚メディアである。漫画は，視覚の残像を利用した映画のような仮現運動をもたない。漫画は，また，音・声をもたない。映画は，その発達過程において，動きを，また，音・声を備えていく。テレビは出現の当初から動きと音・声を有していた。動きと音・

声をもたないことが，映画とテレビと比較したとき漫画の大きな特徴である。北岡は「翻訳不可能なものの，こうした翻訳こそが，新しい思想を創り出す機構である」（p.96）と述べていたが，動かないものを動かし，音のないものに音を響かせるという，不可能への挑戦が，漫画の表現を活性化しているものである。

すでに見たように，漫画は絵巻物と違って，切れ目のない連続した紙面に構成されているのではなく，一定の紙幅を，定型，不定型のコマに分割し，記号空間を造成している。コマとコマとの関係は，連続ではなく，断続したものである。このコマ取り（フレーム）によるコマの断続が動きを生み出す1つの要因である。コマとコマとの間の空白は，空白であることによって，ストップ・モーションの描画を飛躍させ，動きを予想させる。この飛躍を可能にするのは，読者の想像力の参加に負うものが大きいであろう。

石子は次のような意見を述べている；

ぼくがここで指摘したいのは，連続マンガのコマとコマとをつなぐフレームの線によってできる空白の帯の部分の意味作用の論理である。連続漫画のおもしろさの秘密や，劇展開のダイナミズムは，あの空白部分にあるのではなかろうか，とぼくは考えている(p.67)。

岡田は，円板の両面に違った絵を描き，回転させると，裏と表の絵が一つにかさなって，動く絵になるエピソードを紹介している（pp.120—121)。円板の裏から表への回転は，漫画の1つのコマから別のコマへの転回を意味している，とみなし得る。回転機能が，つまりは，フレームとフレームの空間と同じ働きをなすといえよう。

漫画の人物の人称は，「私」とか「誰それが氏」等の代名詞をもたない。絶えず，描画として，「私」や「誰それが氏」が，コマ中に表現されている。視角が異なり，表情が異なり，ポーズが異なり，背景が異なっていても，その人物は，その人物として現われてくる。この立ち現われは，先の円板の絵の絶えざる回転と同じ効果をもつ。違いは，ストップ・モーションの定着としての，同じポーズが重複して，漫画には，現われることはない点である。

写真は，一瞬の動きをとらえ，瞬間を記録する。とらえられた瞬間は，二度とは生起しない。動きをとどめ，とどめられた動きは，動きをはらんで，動きを予感させる。写真の動きについて，岡田はこう説明している；

写真が動かないのは，単に物理的な意味で動かない，動きが知覚されないだけであって，写真もまた動いている，動きをとらえている，動きの一瞬を切り取り，動きを表わしている。すなわち写真の映像は潜在的に動きを秘め，動きを想像的意識において感じさせるものなのだ（pp.133—134)。

このことは，漫画にもあてはまる。写真にときとして表われる，「ブレ」が動きの名残りを示す。これが，漫画の動き表現の描画技術として洗練されていく。描画による動きの補助線効果がそれである。

動きを強化・補助するのは，動きに付与されるオノマトペである。動きに伴う音響は，オノマトペ的に表現を与えられることによって，動きに現実味を生じる。

オノマトペは，いうまでもなく，音響も表現する。オノマトペは，コマの中で，単に言辞的として表現されるのではない。それは言辞でありながら，同時に描画の一部，いや，描画そのものとなっている。

また，吹き出しの形状も，発話者の声の質や，声の大小，そして感情の質を表現する。吹き出しの形状によって，言辞は音を付与される。

それだけでなく，動きと音を獲得した漫画は，そのうえ，各コマの背景に，いわゆる心理的背景（バック）を描画されることによって，目に見えない，耳に聴えない，心の中の動きを見，そして聴くことができる。

こうして，漫画は，制約であるところの音と動きという「翻訳不可能な」領域を，表現技法を新しく開発していくことによって乗り越えていく。

漫画は映像ではない。岡田（1977）は，「映像」を次のように説明している；

＜映像＞はレンズ，フィルム等のメカニズムから生れてくる。メカニズムが＜映像＞に不思議な能力を与

える。確かに，<映像>も物的イメージの一種であり，世界を意味する記号である。写真の映像は印画紙の上に見られるし，映画の映像はフィルムに記録され，テレビの映像もまた，ビデオ・テープをもっている。印画紙，フィルム，ビデオ・テープは，一つのまとまったものである（p.113)。

引用を続ける；

写真の伝達には印刷という手段を踏む。映画は，映画館のスクリーンに写し出される。テレビは放送されなければ大衆に伝わらない。<映像>は，印刷，上映，放送という大量生産手段，複製技術を通して，はじめてマス・メディアとなり，写真としての，映画としての，テレビとしての独自な性格を完了する（p.145)。

岡田は，「映像」に「表現構造」と「伝達機構」を区分している（p.218)。映像を機能でとらえると，写真は記録を，映画は表現を，そしてテレビは伝達の機能がある，とされる（cf. 岡田，p.222)。

漫画の果たす機能を考えると，映画と同じく表現であり，その伝達機構は，写真と同じく印刷という伝達手段である。漫画は，形態としては，雑誌や書籍と同じものである。しかし，漫画は，副田（1976）が「それらの本質的要素は，雑誌や書籍としての形式にはなかった」，それどころか「新しいメディアが登場したと考えるべきであった」（p.7）と主張しているように，写真，映画，テレビに並ぶ新しいメディアである。

したがって，漫画の読みの研究は，メディア接触という観点からのアプローチが必要とされる，といえよう。しかも，今日，映画，テレビ，漫画の各媒体は相互滲透的である（cf. 岡田，p.146)。表2に，副田による，映画，テレビ，漫画の各媒体の特質の比較を掲げる（p.11)。これは，送り手ではなく受け手の側から見た場合の，各媒体の特性を示している。

4. 漫画伝達

漫画は意味を伝達する。佐藤（1973）は，漫画を「意味の芸術」(p.339）としてとらえ，「まんがは，意味がよくわかって，その意味で成功させなければならない」（p.340）といい，また「まんが家は，意味のつまった絵

表 2　享受主体からみた映画・テレヴィ・マンガメディアの特性

	映　画	テレヴィ	マンガ
享受主体の一般的ありかた	観衆	家族	個人
享受の空間	映画館	居間・茶の間	個室・車中・どこでも
享受の時間	上映時間	放映時間	いつでも読みたいとき
選択における他メディアの影響	ある	ややある	ない
広告	多い	いくらかある	ほとんどない
提供されている作品のリスト	ある（映画案内）	ある（番組欄）	ない
批評	ある（事前的）	ある（事後的）	ほとんどない
身近かな人間の意見	ある	ある	ある
選択における作品自身の影響	あまりない	ある	ある
選択の途中での放棄	あまりない	ある	ある
作品の提示の進行	製作主体のみ	製作主体＋享受主体（製作主体>享受主体）	製作主体＋享受主体（製作主体<享受主体）

を描かなければならない」(p.343) としていた。紙面に描かれているのは「意味」ではなく漫画記号である。佐藤は，この漫画記号が意味を充満していることを期待している，とみなし得る。意味は，この記号によって伝達される。

図3は，大城 (1975) の「コトバ過程の構造モデル」を変形して示したものである。

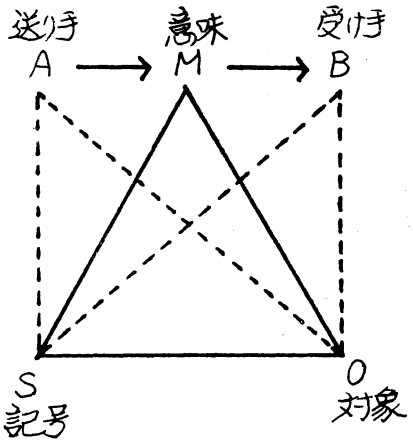

図 3　漫画伝達モデル

マス・メディアの1つとしての漫画の伝達は，まず印刷されることに始まる。印刷紙面上の記号，これが漫画作品である。漫画作品は，同時に「意味」と「対象」を荷っている。この漫画記号を介して送り手（A）と受け手（B）はある。漫画記号（S）によって，送り手は，意味（M）と対象（O）を表現し，かつ伝達したものと考える。漫画記号によって，受け手は，意味と対象を読み取り，理解したと考える。図3で，Mは，SとOをつなぐ機能としてある。三角形ASO，すなわち，送り手の意味領域と三角形BSO，すなわち，受け手の意味領域は，常に同じというわけではない。両者は，共通にSを使用しながら，Mそして，Oが異なることもあり得る。

伝達において，送り手は自己の送っているはずの内容を知っている。受け手は，送り手によって，送られる内容（意味）が，送られるまでは，その内容を知り得ない。このような型のコミュニケーションを，ロトマン (1979) は，<私—彼>的コミュニケーション体系と呼んでいる (p.101)。ロトマンによれば，<私—彼>コミュニケーションの特徴は次のようになる；

「私」が伝達主体，情報所有者であり，「彼」はその対象，受け手である。この場合，「私」にはコミュニケーション行為以前になんらかの通報（メッセージ）が知られているのに対し，「彼」には知られていない，と仮定される (p.98)。

ある一定量の情報の伝達を保障する (p.101)。

この<私—彼>コミュニケーションでは，このプロセスでは，一方から他方へ単に通報が伝えられるだけで，通報を越えた新しいものはなんら付加されない。

<私—彼>コミュニケーションに対置されるものは<私—私>コミュニケーションである。これは自己コミュニケーションである。このコミュニケーションでは「新しい通報ではなく新しいコードが導入され，受け手と送り手は同一人物が兼任するのである」(p.119) また「情報の増大を志向している」(p.129) とロトマンはいう。

ロトマンの説明は，ヤコブソン (1973) のモデルによっている。ただし，<私—私>コミュニケーションは，ロトマン独自の概念である。図3に即していえば，上述の「通報」とは，漫画記号であり，「コード」とは，「対象」と「意味」に対応するであろう。ド・ソシュール的にいえば「ラング」のことである。<私—彼>チャンネルにおいて，コードが「共通」であることが，完璧なコミュニケーションの前提である。つまり，送り手と受け手が「等価」コードをもつことによってのみ，完璧なコミュニケーションは可能になる。

北岡 (1980) は，ヤコブソン・モデルを「等価モデル」と呼び，ロトマンのモデルを「示差モデル」としている (pp. 90—96)。ロトマン・モデルをここでは詳細に論ずることはできないが，端的にいって，このモデルは，必ずしもコードの等価性を厳密にしない，個人差を考慮したモデルだと考えられる。

漫画作品を読む（解読し復号化する）場合に，読者は，

単に記号化されたものだけを受け取るのではない。中野（1980）は，「漫画には空白の部分が多い」とした後で，その空白の機能の説明を次のようにしている；

> その空白部分，象徴部分は，読者が何かを書き込むために残されている。その部分にイメージを書き込み，意味を付与することこそ，漫画を見ることなのだ。つまり，自らの想像力によって，漫画における表現の完成に読者自身も積極的に介入していかねばならない（p.109）。

中野の伝える次のエピソードは漫画の伝達を考えるうえで興味深い；

> ある学生は，題名と主人公が描かれている扉を見ただけで，今週どう展開していくか読めるという。……そういう見方，読み方は，漫画のよさ・「面白さを半減させるから邪道だという意見もあった。これに対する反論は，最初の予測を作者がどう外していくか，それを確かめるために読むのだ，スリルがあって面白いではないか，というのである。こうなると，漫画をめぐって作者と読者がゲームをしているに等しい（同上）。

送り手は，伝えたいことを伝えるために，かえって伝えないこともある，ということがこれらの引用から読み取れるはずである。受け手の読み取りの自由性の領域が，漫画には，大幅に残されている。そうすると，これは，もはや，等価モデルの考え方では処理できない。つまり，意味がよりよく伝わることを前提としないコミュニケーションであることが分かる。かえって，伝えられない部分に意味を付与する等の，読者の創造的介入を可能にすることが，よりよい伝達であるとさえいえそうである。つまり，漫画伝達は，ロトマン・モデルの側面も併せもっている。

漫画記号は，すでに見たように「アナログ／ディジタル」言語である。アナログ情報はもともと曖昧さを伴った情報である。また，一義的性格の強いディジタル情報も，漫画の場合は委細を尽さない言辞表現である。吹き出しに収まる文字の量は，たかが知れている。

この特徴は，送り手の側にあっては，表現活動の自由性を，受け手の側にとっては，読みの自由性を許容するものである。もともと単方向的であるこのコミュニケーションでは，正確に伝わることは，最初から期待されていないのかもしれない。しかし，にもかかわらず，漫画伝達が伝達であるためには，ちょうど自然言語がある種の規約的な文法を備えているように，漫画にもある種の規約性が存在し，この規約に沿って，漫画媒体が媒体として成り立っている。そして，伝達が可能となるような「文法」があると考えられる。

要 約

本研究の目的は漫画表現の特徴を分析することである。

基本的な前提は，漫画がコミュニケーションの論弁的かつ現示的形式の1つである，ということである。漫画は，一種の記号体系とみなし得る。そして，本稿では，マンガを記号論的な視点から検討している。

本稿は次のような仮説を提出している；

1）漫画は記号である。
2）漫画はアナログ／ディジタル言語である。
3）漫画は描画・表言的コミュニケーションメディアである。
4）漫画は時間・空間的表現形式である。
5）漫画は線描的に構成される。
6）漫画は，動きと音を紙面に表現する。
7）漫画は，結局，意味の表現である。

漫画記号論は，人間の情報処理についての理解に資するものと考えられる。

引用文献

1. ベラ・バラージュ（佐々木基一，訳） 1966 『映画の理論』 学芸書林（Béla Balázs 1949 *Der Film*）
2. 福富 護 1977 「ユース・カルチャーとしてのマンガ，2」『青年心理』 №5 pp. 137—143
3. ホグベン，L.（寿岳文章，他訳） 1979 『洞窟絵

画から連載漫画へ』　岩波書店(Hogben L. 1949 *From Cave Painting to Comic Strip*)

4. 市川亀久彌　1978　『創造性の科学』　日本放送協会出版協会
5. 飯沢　匡　1978　『現代漫画家列伝』　創樹社
6. 石子順造　1979　『現代マンガの思想』　大平出版社
7. 磯貝芳郎　1980　「マンガの社会心理学」『青年心理』　No.19, pp.18—29
8. 磯谷　孝　1977　「言語記号論の到達点」『思想』No.640, pp. 1—23
9. イワーノフ, B. B.（北岡誠司, 訳）1977「記号論の役割」『思想』No.640, pp. 24—39
10. ヤーコブソン, R.（川本茂雄, 監訳）1973『一般言語学』みすず書房 (Jakobson, R. 1973 *Essais Linguistique Générale*)
11. 川野　洋　1972　『芸術情報の理論』　新曜社
12. 紀田順一郎　1977　『知性派の読書学』　柏書房
13. 金城光子・大城宜武　1975　「舞踊認知の意味論的研究」『琉球大学教育学部紀要』　第18集　第2部 pp. 27—39
14. 北岡誠司　1980「文化の構造・知の構造」『思想』No.667, pp. 78—105
15. Langer, S. K. 1953 *Feeling and Form*, Charles Scribner's （ランガー, S. K.（大久保, 他訳）1970, 1971『感情と形式 I, II』太陽社）
16. Langer,S.K. 1954 *Philosophy in a New Key*, Menter Book （ランガー, S. K.（矢野, 他訳）1966　『シンボルの哲学』　岩波書店）
17. マルタン, M.（金子敏男, 訳）1975　『映画言語』みすず書房　(Martin, M. 1955　*Le Language Cinématographique*)
18. 松沢光雄　1979『日本人の頭脳をダメにした漫画・劇画』　山手書房
19. みなもと太郎　1980　「みなもと太郎のなんだなんだなんだ」『月刊　マンガ少年』　第5巻　第1号 pp. 287—290.
20. 中島　梓　1978　「おとなはマンガを読まないで」『中央公論』　第93巻第11号　pp. 248—257
21. 中野　収　1980　「媒体としての漫画」『青年心理』No.19, pp. 104—110
22. 岡田　晋　1977　『映像』　美術出版社
23. 大城宜武　1975　「意味の意味論的研究」『心理学評論』V. 18 No.2, pp. 59—73
24. ロトマン, Yu.（磯谷 孝, 訳）1979　『文学と文化記号論』　岩波書店
25. 佐藤忠男　1973　『日本の漫画』　評論社
26. 出版年鑑編集部　1979　『出版年鑑1979』　出版ニュース社
27. 副田義也　1972　「少年マンガ—七つの大罪はほんとうか」『児童心理』　第22巻12号　pp. 52—57
28. 副田義也　1976　「概説・マンガ文化試論」『現代のエスプリ』　No.108　pp. 5—20
29. 総理府青少年対策本部, 編　1977　『青少年白書 昭和52年版』　大蔵省印刷局
30. 総理府青少年対策本部, 編　1979　『青少年白書 昭和54年版』　大蔵省印刷局
31. Spiegelman, M. et al 1953 "The Content of Comics," *Journal of Social Psychology* V. 37 pp. 189—203
32. 竹内敏雄　1975　『芸術記号論』（講座芸術新思潮）美術出版社
33. 手塚治虫　1979　「珈琲と紅茶で深夜まで……」『ぱふ』　第5巻第9号　pp. 39—70.
34. ウスペンスキー, B. A.（北岡誠司, 訳）1979「芸術テキストの《枠》」『現代思想』V. 7　No.2 pp. 89—101　(Uspenskey, B.A. 1970 "The Frame of an Artistic Text" in *A Poetics of Composition*. by B.A. Uspenskey)
35. ウイナー, I. P. and ウイナー, T. G.（今井成美, 訳）1978「文化記号論入門」『現代思想』V. 6 No.3 pp. 110—170 (Winner, I.P. and Winner, I.

G. 1976 "The Semiotics of Clutural Texts." *Semitica* V.18 No.2)

36. Zorbaugh, H.1944 "A Magazine of Theory and Practice, Editorial." *Journal of Educational Socilolgy* V.18 pp.193—194

SUMMARY

The purpose of this paper is to identify the expressional features of comic strips. The basic proposition is that they include discursive and representational forms of communication. Comic strips can be viewed as a sign system, and are discussed here from a semiological point of view. Their expresseional features are identified as follows : 1) comics utilize a sign system for communication, 2) comics are a picto-verbal medium of communication, 3) comics include analog and digital representations of language, 4) comics express time-space relationships, 5) comics are essentially the products of drawing, 6) comics express sound and motion on paper, and 7) comics are representations of meaning.

The semiology of comic strips will contribute to an understanding of human information processing.

The Science of Reading, Vo. 24, No. 3 (1980)

読書材料と理解の関係(3)
——Legibility 要因の検討——*

筑波大学
池田進一**

はじめに

本研究は，異なった文脈的類型をもつ2つの文章を材料にして，読書理解の機構を探ろうとするものである。

前2回の報告（池田，1979；池田，1980）の概要は次の通りである。

大学生を被験者に，類型が異なり，読みやすさ（readability）の等しい2つの文章—宮本百合子「伸子」，中山義秀「厚物咲」—を2回ずつ音読させ，その直後，読んだ文章の理解に関するそれぞれ7題の質問に筆答させるという実験を行なった。2つの材料文を Table 1, 2 に，その理解課題と解答例を Table 3, 4 に再掲する。両材料文は，安本（1965）による8つの文章類型のうちの2つであり，叙事的で修飾語が少ないという共通点をもつが，会話文の多少に相違が認められるものである。こうした実験の結果，次の諸点が明らかになった。(1)読速度は，2つの材料文とも1回目より2回目のほうが有意に速く，かつ一貫して「厚物咲」より「伸子」のほうが有意に速かった。(2)理解度については，まず，各理解課題が無難なものであることを項目分析によって確かめた。そして，理解課題間の因子分析から，「伸子」では，遂語的記憶因子，冗長な遂語的記憶因子，特殊な遂語的記憶因子の3因子が，また，「厚物咲」では，客観的事実の記憶因子(遂語的記憶因子)，主観的事実の記憶因子の2因子が，それぞれ抽出された。さらに，誤反応分析から，2つの材料文間で誤反応パタンが異なることが見出された。(3)読速度と理解度の関連では，「伸子」の2回目の音読にゆっくり読んだ者ほど理解度にすぐれる傾向があった。

Table 1　漢文・非修飾・会話型の文章
宮本百合子「伸子」の一節

伸子は、元気なく彼を見上げ、訊いた。
「——欠点をなおすからって——じゃああなたはどこが悪かったの？」
「そんなこと分るもんですか——」
彼は決然肩をそびやかすようにし答えるのであった。
「私は自分が悪かったとは思わない。しかし君がそういうからそんなこともあるなら、なおそうと云うのじゃないか」
伸子は、溜息をつき、云った。
「だからね、もう水掛論のようなことはやめにしましょう、ね。悪いと云えば二人がわるいのよ、喧嘩両成敗よ。——ただ、せめて少し物の分る人間らしく、もっと傷つけ合うことだけはやめたいわ」
暫く黙っていた後、佃は考え深そうに云った。

* Relationship between reading material and comprehension (3) : An investigation of legibility factor.

** IKEDA, Shinichi (University of Tsukuba)

Table 2　漢文・非修飾・文章型の文章
中山義秀「厚物咲」の一節

過労が瀬谷をおとろえさせた。そのため彼は女性に無関心であることができた。彼の顔の皮膚は灰のように濁っていた。眼は飛びだして鋭かった。頭髪は脱けおち、地肌が白くすいて見えた。一度二度三度と弁護士試験の数を空しく重ねてゆくにしたがって、彼にとり試験は業苦にちかいものとなった。恐怖と不安のため彼は受験場では全くの痴呆者だった。日々夜々諳誦しつづけた条文の一行すら思いだすことができなかった。彼は脂汗をたらして時間一杯を最後まで苦しみ、とうとう白紙を出した。そして外見だけは昂然と場外まで歩いて来て不意にばったりと倒れた。

本実験は，以上の諸結果と比較しつつ，見やすさ(legibility) 要因が，読速度，理解度，読速度と理解度の関連などに及ぼす効果を検討するために企てられたものである。

方　法

実験年月　1979年11月

被 験 者　大学生22名

材料　見やすさ要因を吟味するための方法は，Table 1 を Table 2 と同様に頻繁な行変えのないように印刷して被験者に提示することとしたことである（Table 5 参

Table 3　「伸子」における質問と解答例

(1) 質問―伸子はどのように彼を見上げたか。
解答―元気なく。

(2) 質問―彼は自分のどこが悪かったといったか。
解答―分るもんですかといった。

(3) 質問―彼は伸子の「どこが悪かったか」の問いにどのような態度で答えたか。
解答―決然肩をそびやかすようにして。

(4) 質問―彼は自分に欠点があるのなら，どうするといったか。
解答―なおそうといった。

(5) 質問―伸子はだれが悪いといったか。
解答―二人。

(6) 質問―伸子は少し物の分る人間らしく何をやめようといったか。
解答―傷つけ合うこと。

(7) 質問―佃は暫く黙っていた後どのような態度でいったか。
解答―考え深そうに。

Table 4　「厚物咲」における質問と解答例

(1) 質問―なぜ瀬谷は女性に無関心だったか。
解答―過労のため。

(2) 質問―彼の顔の皮膚はどのようだったか。
解答―灰のように濁っていた。

(3) 質問―彼の頭の地肌はどのようだったか。
解答―白くすいて見えた。

(4) 質問―試験は彼にとりどのようなものだったか。
解答―業苦にちかいもの。

(5) 質問―なぜ彼は受験場では痴呆者だったか。
解答―恐怖と不安のため。

(6) 質問―彼は試験のときどのような状態で苦しんだか。
解答―脂汗をたらして。

(7) 質問―彼はどのような態度で場外まで歩いて来たか。
解答―昂然と。

Table 5　本実験で用いられた宮本百合子「伸子」

伸子は、元気なく彼を見上げ、訊いた。「――欠点をなおすからって――じゃあなたはどこが悪かったの?」「そんなこと分るもんですか!」彼は決然肩をそびやかすようにして答えるのであった。「私は自分が悪かったとは思わない。しかし君がそういうからそんなこともあるなら、なおそうと云うのじゃないか」伸子は、溜息をつき、云った。「だからね、もう水掛論のようなことはやめにしましょう、ね。悪いと云えば二人がわるいのよ、喧嘩両成敗よ。――ただ、せめて少し物の分る人間らしく、もっと傷つけ合うことだけはやめたいわ」暫く黙っていた後、佃は考え深そうに云った。

照)。

手続き　前実験と異なるのは，実験終了後，各被験者に「どちらの文章がより理解しやすかったか」の質問に，「伸子」，あるいは「厚物咲」かの2件法による強制選択を求めたことである。この目的は，主観的な「理解しやすさ」と客観的な指標による「理解しやすさ」との関連を調べることであった。なお，材料の提示順は，音読順序と材料の特殊性を相殺するため，「伸子」，「厚物咲」の順の者11名，その逆の順の者11名とした。

結果と考察

I．読速度

本実験と前実験における材料と音読回数ごとの読速度の平均値（対数変換値）とその標準偏差値をTable 6に示す。両実験の値を比較してみると，「伸子」の1回目には有意差はなかったが，2回目に本実験の値のほうが有意に速い傾向があった（$t=1.950$, $df=68$, $p<.1$)。一方，「厚物咲」には1回目，2回目とも両実験間に有意差は認められなかった。

Table 6　本実験と前実験の材料と音読回数ごとの読速度の平均値とSD

材料文	実験の種類	1回目	2回目
伸　子	本実験	1.772 (0.072)	1.670 (0.043)
	前実験	1.768 (0.062)	1.701 (0.068)
厚物咲	本実験	1.812 (0.068)	1.728 (0.047)
	前実験	1.803 (0.074)	1.745 (0.082)

本実験 n＝22　　前実験 n＝48

2実験間で「厚物咲」に有意差がないという結果は，見やすさ要因が同一だったのだから，被験者群間で読速度能力に差がなかったことを示している。逆に，「伸子」では見やすさ要因が変えられたために2回目の音読に有意な傾向が生じたと考えられる。つまり，本実験で頻繁な行変えを改め，全体で一段落としたことが，被験者の材料文を追う眼球運動を必然的に速くさせたのであろう。

次に，Table 6の本実験の値をもとに，読速度に関し材

Table 7　本実験における2要因（材料，音読回数）についての分散分析表

SOURCE	SS	df	MS	F	P
材　料	.052	1	.052	13.000	.01
音読回数	.190	1	.190	47.500	.01
交互作用	.002	1	.002	.500	
誤　差	.307	84	.004		
全　体	.551	87			

料と音読回数の要因について分散分析にかけた（Table 7)。その結果，材料と音読回数のどちらの主効果も1%水準で有意であったが，その交互作用は有意でなかった。ここから，前実験と同様，両材料文とも1回目より2回目のほうが有意に速かったこと，および，1回目，2回目とも「厚物咲」より「伸子」のほうが有意に速かったことが確認された。

II. 理解度

理解課題の採点に際しては，1問につき，原文通りの完全正答に4点，原文通りであるが不完全な答に3点，原文とは異なるが意味的には正答に2点，原文とは異なり不十分な答に1点，誤答および無答に0点をそれぞれ与えるという基準を設けた。

2実験における理解課題得点の分布を比較すると，ノンパラメトリック法のコルモゴロフ・スミルノフのテストの近似法によれば，「伸子」では有意に前実験の値のほうが高かったが（$x^2=7.477$, $df=2$, $p<.05$)，「厚物咲」では有意差を示さなかった。この結果は，見やすさ要因が理解度に敏感に影響を及ぼすことを示唆しているものといえよう。会話文という特徴をもつ「伸子」で，原文（Table 1）のように頻繁に行変えをすることは，読み手にとって，発話者をより特定しやすくさせ，その発話者の心情をより深く理解し得るという効果をもつと推察される。

次に理解課題の誤反応を分析しよう。2実験において，各理解課題で3点以下の解答を誤反応とし，その数と割合をまとめたものがTable 8である。ここで特徴的なのは，各カテゴリーの出現頻度が「厚物咲」ではほぼ類似した傾向を示しているが，「伸子」の本実験では，「誤答」と「無答」とを合せると全体の85%を占めている点であろう。これは見やすさ要因が影響して，本実験の「伸子」では，読み手が文章の意味を把握することが前実験より困難になったためと考えられる。

Table 9 本実験と前実験における読速度と理解課題の相関係数

材料	実験の種類	1回目	2回目
伸子	本実験	−.315	−.408*
	前実験	−.156	−.282
厚物咲	本実験	−.168	−.043
	前実験	−.147	.024

本実験 n＝22，前実験 n＝48　　*p＜.05

III. 読速度と理解度との関連

2実験における読速度と理解度との相関係数（r）をまとめたものをTable 9に示す。表中で負の値は読速度が遅いほど理解得点が高いことを意味している。全体的には2実験間で対応する各値に大きな差はなかったといえよう。

見やすさ要因の効果としては，「伸子」の2回目で，前実験では有意な傾向であったが（$t=1.994$, $df=46$, $p<.1$)，本実験では有意差に達した（$t=1.998$, $df=20$, $p<.05$）点が注目される。この結果も，読み手が，頻繁な行変えのない会話文をゆっくり読むことによって，発

Table 8 本実験と前実験における両理解課題の誤反応傾向

材料文	カテゴリー／実験の種類	原文通りであるが不完全な答	意味的正答	意味的に不十分な答	誤答	無答	全体
伸子	本実験	13(11.5%)	3(2.7%)	1(0.9%)	47(41.6%)	49(43.4%)	113 (100%)
	前実験	19(8.3%)	33(14.4%)	52(22.7%)	24(10.5%)	101(44.1%)	229 (100%)
厚物咲	本実験	31(28.7%)	6(5.6%)	0(0.0%)	30(27.8%)	41(38.0%)	108 (100%)
	前実験	40(16.4%)	16(6.6%)	73(29.9%)	39(16.0%)	76(31.1%)	244 (100%)

Table 10　本実験と前実験における各読み誤りの出現頻度

材料文	カテゴリー／回数／実験の種類	省略 1回	省略 2回	代置 1回	代置 2回	付加 1回	付加 2回	倒置 1回	倒置 2回	計 1回	計 2回	総計
伸子	本実験	2	3	4	4	3	6	0	0	9	13	22
	前実験	7	5	6	8	5	3	0	0	18	16	34
厚物咲	本実験	4	4	12	8	2	2	0	0	18	14	32
	前実験	11	14	21	24	11	8	1	1	44	47	91

本実験 n＝22　　前実験 n＝48

話者の特定，発話者の心情の理解，場面の把握などをより容易にしえたことを示唆しているものと思われる。

Ⅳ．読み誤りの分析

前実験についての読み誤りの分析は行なっていなかったので，本実験のものと併せて報告する。被験者の読み誤りの内容を省略，代置，付加，倒置の4種に分け，2実験におけるそれぞれの型の出現頻度を集計したものがTable 10 である。両実験の結果に共通しているのは，全体に「厚物咲」に誤りが多い点，誤りの数は2回目に減少しているとは限らない点，および，省略と代置が相対的に多い点である。相違点としては次の2点があげられる。第1は，「伸子」において，前実験では2回目の総計は1回目のそれより減少しているが，本実験では逆に増加していることである。第2は，「伸子」での1人当りの平均読み誤り数は，前実験では0.7回，本実験では1.0回と本実験のほうが多いことである。これらの原因も見やすさ要因に帰することができよう。すなわち，適切な行変えがなされていない会話文は，正確な音読をしにくくするのであろう。

次に，正読者（1回も読み誤りをしなかった者）と誤読者（1回以上読み誤りをした者）との間に読速度および理解度に関して差があるかどうかを分析してみる。

2実験の両材料における正読者群と誤読者群間の読速度の値の差をt検定するといずれも有意ではなかった。したがって読み誤りの有無と読速度とは関連しないといえる。

理解得点の正読者群と誤読者群間の値の差をノンパラメトリック法の ω^2 テストにより検定すると，「伸子」では有意な差を示さなかったが，「厚物咲」では前実験，本実験とも正読者群が理解得点にすぐれる傾向にあった（前実験 $n\omega^2=.354$，$n_1=19$，$n_2=29$，$p<.1$；本実験 $n\omega^2=.441$，$n_1=9$，$n_2=13$，$p<.1$）。これは2つの材料文の文章類型に原因を求めることができよう。論理的な文章である「厚物咲」では，読み手が語句を正確に音読しなければ高い理解得点を得ることはできなかったが，会話文という特徴をもつ「伸子」では，多少の読み誤りをしても，全体の場面や登場人物の心理をつかむことができれば理解課題に解答しえたと考えられる。

以上から，見やすさ要因は読み誤りと読速度および理解度との関係に効果を及ぼさないといえよう。

Ⅴ．自己評定と読速度および理解度

「手続き」の項で述べたように，本実験では，各被験者に「どちらの文章が理解しやすかったか」の質問に2件法による強制選択をさせた。その結果，「伸子」と答えた者7名，「厚物咲」と答えた者15名であった。この2群間で両材料文の読速度と理解度に差があるかどうかを調べてみた。

読速度に関しては，対応する各値の差はいずれも有意ではなかった（t検定）。ここから，読み手にとっての主観的な理解しやすさは読速度と関連をもたないことがわ

かる。

理解度に関しては，両材料文とも「理解しやすい」と評定した群のほうが高い得点をとっていたが，ω^2 テストにより検定すると2群間にいずれも有意差は見出されなかった。したがって，読み手の主観的な「理解」と，本実験の理解課題で測定した「理解」とは必ずしも一致するものではないといえるだろう。しかし，本研究に関する限り，2つの「理解」をより詳細に論ずるためには，方法論上改善すべき問題が残されている。第1に，2件法による強制選択という単純な方法ではなく，読み手の「理解」がもっとも反映するような客観的な指標を考案せねばならない。第2に，第2報（池田，1980）で述べたように，理解課題の結果を材料文間で同列に論じられるよう理解課題そのものをより洗練した形式にしていく必要があろう。

要　約

池田（1979），池田（1980）では，大学生を被験者に，困難度が等質で類型の異なる2つの文章―「伸子」および「厚物咲」―を音読させ，その後，読んだ文章の理解に関するそれぞれ7題の質問に筆答させるという実験の結果を報告した。本実験では，「伸子」の印刷上の見やすさを「厚物咲」と同じ条件に変え，見やすさ要因が及ぼす諸効果を前実験の結果と比較しつつ検討した。

「厚物咲」では，本実験と前実験との結果の間に差は見られなかった。

「伸子」における見やすさ要因に関連する主な結果は次の通りである。

1. 読速度は2回目の音読で本実験のほうが有意に速かった。
2. 理解度は本実験のほうが有意に低かった。
3. 理解課題の誤反応分析では，本実験で「誤答」および「無答」が大半であった。
4. 読速度と理解度との関連では，本実験で2回目の音読に遅く読んだほうが理解得点に有意に高かった。
5. 読み誤りは本実験のほうが多かった。
6. 読み誤りと読速度，および読み誤りと理解度との関係には，見やすさ要因は効果を及ぼさなかった。

他に，主観的な「理解」と読速度，理解度との関連が検討された。そこでは顕著な結果は見出されなかった。

引用文献

池田進一　1979　読書材料と理解の関係(1)―音読速度からの分析―　読書科学　23，4，115―120

池田進一　1980　読書材料と理解の関係(2)―理解課題の分析―　読書科学　24，2，56―62

安本美典　1965　文章心理学入門　誠信書房

SUMMARY

This study was carried out in order to investigate the effects of legibility on reading comprehension. The results of this experiment were compared with those of an earlier experiment (Ikeda, 1979; Ikeda, 1980). Two different contextual styles of reading materials were used : a conversational-colloquial style taken from the novel *Nobuko* by Y. Miyamoto, and a narrative-literary style from the novel *Atsumonozaki* by Y. Nakayama. In the earlier experiment, the passages from *Nobuko* and *Atsumonozaki* were reproduced as they appeared in the originals. In this experiment, the passage from *Atsumonozaki* was in the same form as the original, but the legibility of the passage from *Nobuko* was altered by compressing the width of the lines in the original of *Nobuko* to correspond with their width in *Atsumonozaki*. The readability levels of the two passages were equal.

Twenty-two college students read each passage orally, twice. Their reading speed was recorded for each passage, and the students' reading comprehension was assessed using seven questions for the passage from each novel.

The reading speed and level of comprehension which were attained for the passage from *Atsumonozaki* were the same as reported in the previous studies.

In regard to the passage from *Nobuko*, the results were as follows: 1. the mean reading speed of the second oral reading was faster, 2. the mean comprehension score was lower, 3. most of the errors on the comprehension items were identified as 'meaningless answers' and 'no answers', 4. there was a greater number of mispronunciations, and 5. an analysis of the relationship between reading speed and comprehension showed that slow readers attained higher comprehension scores in the second oral reading.

These results indicate that changing the legibility of the text has an effect on the speed, comprehension and accuracy of reading.

The Science of Reading, Vol. 24, No. 3 (1980)

曲名と歌詞との関係の比較文化的考察*

筑 波 大 学
守　一　雄**

問　題

“歌は世につれ，世は歌につれ”というよく用いられるいいまわしにもあるように，歌が文化をよく反映することは経験的にもよく知られている。そのため，歌詞を調べることにより，ある国の文化の性格を知ることや文化変容について知ることができると考えられる。例えば，戦後の日本の主な流行歌の歌詞を調べ，その中に，酒，涙，別れ，等の言葉が多いことが報告されたり，俳句という日本独得の詩の形式の中に，季語と呼ばれる季節を表わす言葉が必ず含まれていることを，日本人の季節に対する関心の深さの表われと見たりすることができるわけである。最近では水谷（1975，1978）が昭和初期の流行歌について，歌詞の延べ語数と異なり語数との比などを中心にした数量的分析調査を行なっている。

しかし，こうした研究は，よく考えて見ると，日本語の運用語彙のサンプリング調査の一種であり，歌なり俳句なりという比較的限られた言語運用形式に焦点をあてることにより，サンプリングが容易にできるという作業上の理由によりよく行なわれたともいえよう。事実，大型コンピューターと漢字入出力システムの発達により，新聞や小説等の語彙調査が可能になったのは最近のことである。こうした大きな情報処理システムを用いることができれば，文化や言語の特徴を知るための語彙サンプリング調査は，ホームドラマの中の会話分析や週刊誌の用語分析などによっても行ない得るものであり，歌だけに限るものではないことにもなろう。

もっとも，歌は普通に用いられる日常文・散文とは違い，作者の感情をコンパクトに表現したものだと考える限り，歌詞の用語分析の重要性は依然として保たれることは明らかである。

こうした歌のもつ心情的性質を重要視し，そこに映された日本文化——日本人の心——を論じたものに，渡部（1974）がある。渡部は主に和歌を取り上げ，ユダヤ・キリスト教において人々は“神の目から見て平等”であり，1776年のアメリカ独立宣言や1789年のフランスの権利宣言以来，現代民主主義社会では，人々は“法の下に平等”であるとされているが，ユダヤ・キリスト教もなく，現代民主主義もなかった古代日本においても，われわれの先祖は“和歌の前に平等”であったと主張する。例えば，皇別，神別，蕃別をはじめとし，賤民五種，雑戸百十数種と世襲の身分という一種のカースト制があった万葉の時代に，万葉集の中には，上は天皇・皇后から下は乞食やうかれめまでが並べられているのである。同様に現代においても，年頭に行なわれる“歌会始”には，老若男女，貧富，国籍に関係なく，その和歌のために，天皇と同席できるのである。

渡部はこれを日本語特有の言霊思想と結びつけて説明した。こうした歌のとらえ方は従来の歌による文化研究における歌のとらえ方とはまったく違っている。

ここでは，またこれと異なる視点から歌をとらえて見ようと思う。それは，曲名と歌詞の包含関係という視点である。というのは，英語の歌と日本語の歌とを比較すると，この曲名と歌詞の包含関係という点で違いが見られることに気づいたからである。日本語の歌には，歌詞

* The relation between titles and words of songs: Cross-cultural comparisons.

** MORI, Kazuo (University of Tsukuba)

に含まれない曲名をもつ歌の割合が英語の歌に比べかなり高いのではないだろうか。

そこで，こうした曲名と歌詞の包含関係について実際に調べて見るとともに，いくつかの見地から考察を行なうことが本研究の目的である。

調 査 Ⅰ

方 法

日本の代表的歌謡曲を厳選したものといっていいであろうNHK紅白歌合戦（昭和54年）で歌われた歌48曲と，51年11月に発行された“文藝春秋デラックス――心のふるさと日本のうた――特集はやり歌の昭和50年”の中に収められた72曲とについて，曲名が歌詞の中に含まれるか否かを調べる。

英語の歌については，NHK紅白歌合戦に相当するものが見当らないため，後者にほぼ相当すると思われる“The New York Times:Great Songs of the Sixties (1970)”に収められた82曲について，曲名が歌詞の中に含まれるか否かを調べる。

結 果

結果は表―1の通りである。やはり予想通り曲名を歌詞の中に含まない歌の割合は日本語の歌と英語の歌とで非常に異なる。“文藝春秋デラックス”には，表―1に示した72曲の他に日本各地の民謡も収録されていたが，“○○節”という曲名が歌詞に含まれているものは一つもなく，曲名のつけ方の性格の違いを考えて調査の対象から外した。これらをも含めるならば，日本語の歌における曲名を歌詞の中に含まない歌の割合は表―1以上に多いことになる。“文藝春秋デラックス”と“Great Songs of the Sixties”とに収められた154曲についてx^2検定を行なって見ると，表―1に見られる分布の偏りは統計的に有意であることが分かる（$x^2(1)=40.7$，$p<.001$）。

表―1　調査Ⅰ：曲名と歌詞の包含関係

	曲名を含む	曲名を含まない	合計
昭和54年 NHK紅白歌合戦	28 (58%)	20 (42%)	48
文藝春秋デラックス はやり歌の昭和50年	33 (46%)	39 (54%)	72
The New York Times: Great Songs of the Sixties	76 (93%)	6 (7%)	82

調 査 Ⅱ

調査Ⅰの結果，曲名を歌詞の中に含まない歌の割合が日本語の歌と英語の歌とで有意に異なることが分かったが，これは日本語の歌の特殊性によるものだろうか，あるいは英語の歌の特殊性によるものだろうか。

この疑問を解くためには諸外国語における曲名と歌詞の包含関係を調べて見る必要がある。しかし，諸外国語における歌集を手に入れることはかなり困難である。そこで，アンケート形式により，諸外国語における曲名と歌詞の包含関係を直接にそのネイティヴスピーカーに尋ねるという方法をとる。

方 法

以下のような教示によるアンケート調査を行なう。教示文は日本語と英語とで併記する。アンケート記入に要する時間は被験者に任せ，記入がすべて済んだ後返却させる。

「このアンケートは歌についての社会言語学的研究の一部となるものです。下の空欄に記入をお願いします。

まず，あなたの国の言葉で歌われている歌を10曲思い出してください。どんな種類の歌でも構いません。

次に，それぞれの曲名を下のA欄に記入してください。

次に，それぞれの歌について，その歌詞の中にその曲名が含まれているかどうかを調べてください。もし曲名が歌詞の中に含まれているときは，B欄に‘C’，含まれていないときには，‘N’と記入してください。」

アンケートは，筑波大学外国人留学生28名（中華民国13名，韓国4名，タイ3名，ドイツ2名，フランス，オ

ーストラリア，アメリカ，マレーシア，フィリピン，リベリア各1名）と統制群として日本人学生15名に配布し回答を求めた。

結　果

アンケートの結果は表—2の通りである。日本人被験者による回答を調査Ⅰの結果と比較して見ると，ほぼ同様の結果が得られていることが分かる（$x^2(1)=1.71$, $p>.10$）。英語を母国語とする被験者は3名で統計的な比較は困難であるが，ここにおいても調査Ⅰ，Ⅱの間で一致が見られる（英語の歌における曲名が歌詞を含まない歌の割合は，調査Ⅰ，Ⅱともに約7%である）。以上の分析によりアンケートによる調査の妥当性は一応確かめられたと考えることができよう。

調査Ⅱの結果から，日本語においては曲名を歌詞の中に含まない歌の割合が他の諸外国語に比べ有意（$x^2(1)=24.90$, $p<.001$）に高いこと，また日本語に次いで高い割合を示した中国語と比べてもなお有意（$x^2(1)=4.95$, $p<.05$）に高いことが分かった。もっとも中国語の歌も，日本語を除く他の諸外国語に比べ有意（$x^2(1)=14.54$, $p<.001$）にこの傾向が見られた。

以上の点から考えて，曲名と歌詞との包含関係で日本語の歌と英語の歌とを比較するとき特殊であるのは英語の歌というよりも約半分が曲名を含まないという日本語の歌のほうにあると考えるべきであろう。

表—2　調査Ⅱ：曲名と歌詞の包含関係

	回答者数	曲名を含む	曲名を含まない
日本語	15	55%	45%
中国語	13	68	32
朝鮮語	4	80	20
タイ語	3	90	10
タガログ語	1	90	10
マレー語	1	90	10
英語	3[a)]	93	7
フランス語	1	70	30
ドイツ語	2	90	10

a）オーストラリア人・リベリア人留学生を含む。

考　察

日本語の歌と英語の歌との曲名と歌詞の包含関係における際立つ違いは何に原因するのであろうか。ここで，3つの視点から考察をする。

1）シンタクスの違い

英語のシンタクスの基本がS-P（Subject-Predicate, 主—述）関係であるのに対し，三上章（1963）らの新しい日本文法家たちは日本語のシンタクスの基本がT-C（Topic-Comment, 題—述）関係であると主張している。それは，文による表現の態度が“何がどうした”とか，“何がどんなだ”というものではなく，“何々についていえば，それはどうだ”というように，述べられる話題（topic）と述べられる内容（comment）とが明確に分離されているということである。そして，これらは常に1セットで1つのまとまりをなすのである。英語の文において，この話題に相当するものが文脈等の情報によって，S-Pの中から浮び上がってくるのと好対称である。

ここで，この題述関係を歌における曲名と歌詞とに置き換えてみよう。曲名は歌われる話題であり，歌詞は歌われる内容であることになる。一方，主述関係を基本とする英語では，曲名と歌詞との間に明確な分離はなく，歌詞を一つの文と考えるならば，話題に相当する曲名は，文の中から浮び上がってくる，すなわち，歌詞の中から浮び上がってくることになるであろう。

2）曲名に対する考え方の違い

話題の取り立て方の差が曲名に影響を与えるということは逆にいえば，曲名に対する考え方の違いということになろう。日本の歌においては，曲名は話題やコンテキストを示す重要なものとして考えられており，一方，英語の歌においては，曲名は単に曲を呼ぶための名前やインデックスという実用的役目しかもたないのではないだろうか。つまり，歌というのは歌詞と旋律だけで出来上がっており，曲名は歌に含まれていないと考えられているのではないだろうか。それに対し，日本の歌は曲名と

歌詞と旋律から成り立っているのである。

これはちょうど，自動車とバンパーとの関係に対する日本人とアメリカ人の考え方の違いに似ていて興味深い。アメリカではバンパーはその名の通り単なる実用品であり，車とはボディとエンジンから出来上がっているものである。それに対し，日本ではバンパーも立派に車の一部であると考えられている。

3）一定の音節数の中に盛り込める情報量の違い

歌という短かい作品形式の中に盛り込める情報量は日本語では非常に小さい。それは，単語や形態素の構成素がそれぞれ母音を含む音節であるからである。例えば，“Pretend” という歌の “Pretend you're happy when you're blue…” という歌い出しと同じ内容を同じ音節数で日本語で歌うことは不可能である。それでは，短い中に多くの情報を盛り込ませるためにはどうすればよいだろうか。その一つの方法は曲名にも情報を盛り込むことである。そのためには，歌詞と曲名とに重なりがあってはならない。

しかし，今かりに100音節からなる歌詞があったとして，それに曲名を加えたとしても，一割程度増えて110音節程度になるにすぎない。情報量を一気に増大させるには，曲名をたし算的に用いるのではなく，かけ算的に用いる必要がある。これは，すなわち，(1)，(2)の視点から考察したことにつながる。まず曲名は，論理学でいう外延の広い上位概念を用いる必要がある。これが話題であったり，背景であったりするわけである。そして，歌詞よりも上位にある曲名と歌詞との間を埋めるものは，聞き手の想像力ではないだろうか。そして，このことは，曲名が歌詞と異なる次元に置かれていること，すなわち二極構造—T-C関係となるのである。

短い文で多くの情報を運ぶものの典型に俳句がある。わずか十七音からわれわれが豊かなイメージを思い浮べることができるのは，題のない俳句にも，二極構造があるからではないだろうか。俳句を二極構造化させる働きをもつものの一つに切れ字がある。

古池や　かはずとびこむ　水の音

という有名な芭蕉の句は，“古池”という題と“かはずとびこむ水の音”という本文からなる詩とも考えられ，“古池”という題から読者はイメージをふくらませ，そこに“かはずとびこむ水の音”という具体的情報が加わるのである。“古池に…”とか“古池で…”としてはいけないのは，まさにこの二極構造が消失してしまうからである。

最後に，土井晩翠作の“荒城の月”を引用する。この歌もこの題名がなかったならば，歌の深み，味わいは大きく減じられるであろう。

荒城の月

春高楼の花の宴
めぐる盃かげさして
千代の松が枝わけいでし
むかしの光いまいずこ

秋陣営の霜の色
鳴きゆく雁の数見せて
植うるつるぎに照りそいし
むかしの光いまいずこ

以上，3つの視点から考察を始め，全体を統合する形で，日本の歌と曲名との関係の特殊性を述べてみた。日本語の歌と英語の歌との中間的性質をもつと思われる中国語の歌について上述の説明が適用できるか否かは中国語についての知識がほとんどないために何ともいえないが，少なくとも一定音節数内での情報量は日本語の場合より多いはずであり，もし，調査結果に表われた数値が正しいとするならば，日本語と中国語に共通な特徴が存在するのかもしれない。その解明のためにはより多くの被験者による調査と中国語に対する広い知識が必要である。

文　献

三上　章　日本語の論理　くろしお出版　1963

水谷静夫　短い作品の語彙の量的構造—昭和初期流行歌の調査から(1)　計量国語学　72号　1—12　1975

水谷静夫　昭和初期流行歌での語の度数分布—昭和初期流行歌の調査から(2)　計量国語学　11巻5号　191—198　1978

Okun, Milton (Ed.)　The New York Times: Great Songs of the Sixties. Quadrangle Books: Chicago 1970

渡部昇一　日本語について—言霊の視点から諸君！　5月号　20—45　1974

渡部昇一　日本語のこころ　講談社現代新書　1974

日本読書学会会則（1979 年 8 月改正）

第1章　名称と事務所

第1条　本会は日本読書学会と称する。

第2条　本会の事務局は当分の間財団法人野間教育研究所内に置く。

第2章　目的と事業

第3条　本会は読書に関する科学的研究を志す者の連携協力によって日本における読書文化の発達ならびに読書指導の進歩を図ることを目的とする。

第4条　本会は前条の目的を達成するために次の事業を行なう。

1. 会員の研究促進を目的とする大会の開催。
2. 会員の共同研究を目的とする部会の開催。
3. 会員の日常の研究・実践活動の情報の収集ならびにその紹介。
4. 読書及びその指導に関する内外諸文献の調査ならびにその紹介。
5. 内外における関係諸団体との緊密な連絡。
6. 会員の研究業績その他を掲載する機関誌の編集。
7. 会員が本会の組織運営に関して協議する総会の開催。
8. その他本会の目的を達成するために必要な事業。

第3章　組織と運営

第5条　本会の会員は正会員，名誉会員および賛助会員とする。

正会員は本会の趣旨に賛同して会員となることを申し込み会費を納入したものとする。

名誉会員は本会の運営に功労のあったもの，または本会の事業に財政的援助をしたもので，理事会が推薦したものとする。

賛助会員は本会の趣旨に賛同して，賛助会費を納入したものとする。

会員であって会員の義務を怠り，または不都合な行為をしたものは除名されることがある。

第6条　会員は本会が営むあらゆる事業に参加することができ，また本会の機関誌その他の出版物について無料配布または優先的配布をうけることができる。

第7条　本会の事業を運営するために次の役員を置く。

1. 会　　長　　1 名
2. 副 会 長　　1 名
3. 常任理事　　若干名
4. 理　　事　　若干名
5. 監　　事　　2 名

第8条　理事及び監事は，正会員が互選する。

第9条　理事は理事会を構成し，本会の事業執行の責任を負う。

第10条　副理事長は理事の互選により選出し，理事長の任期終了とともに次期理事長となる。

理事長は会長として本会を代表する。副理事長は副会長として会長を補佐し，会長事故あるときは，その職務を代行する。

第11条　常任理事は理事が互選する。

理事長が運営上必要と認めたときは，前項の互選によるもののほか，理事の内2名に限り指名して，理事会の承認を経て，常任理事に加えることができる。

常任理事会は理事長，副理事長及び常任理事によって構成する。

常任理事会は理事長の委託をうけ，本会の通常の運営について常時執行の任にあたる。

第12条　監事は，本会の会計を監査する。

第13条　役員の任期は2年とし，原則として互選の年の4月1日から翌々年の3月31日までとする。

第14条　本会に名誉会長を置くことができる。名誉会長は理事会の推戴による。

第15条　本会の事業を遂行するために事務局に次の職員を置く。

1. 事務局長　　1 名
2. 書　　記　　若干名

事務局職員に関する規定は別に定める。

第16条　本会に支部を置くことができる。支部に関する規定はこれを別に定める。

第4章　会　　計

第17条　本会の経費は会費，賛助会費，寄附金または補助金等によって支弁する。

第18条　会費は当分の間年額4,500円とし，毎月3月末までに次年度の会費を納入すべきものとする。

第19条　本会の会計年度は毎年4月1日より始まり翌年3月31日で終わる。決算報告及び予算案は総会において承認及び審議決定される。

第5章　雑　　則

第20条　本会の会則の改正は総会において審議決定される。

IRA (国際読書学会) 入会のおすすめ

International Reading Association は 1955 年に設立された国際的な読書科学研究の機関で，日本読書学会もこれに加盟しています。日本読書学会の会員で IRA にも入会を希望される方は，下記の要領で入会のあっせんをいたします。

記

1. あっせんを受けるのは日本読書学会の会員に限ります。
2. IRA の会員には次の 3 種の雑誌が配付されます。希望の雑誌名を申し出て下さい。
   (a) The Reading Teacher（小学校の読書教育を中心としたもの）
   (b) The Journal of Reading（中学校以上成人までの読書を中心としたもの）
   (c) Reading Research Quarterly（読書科学研究の専門誌）
3. アメリカ，カナダ以外の IRA 会員には International Newsletter が無料配布されます。
4. 会費は年額次の通りです（海外会員割引額）

雑誌 1 種類の配付を希望する者	$ 12.50
雑誌 2 種類の配付を希望する者	$ 17.50
雑誌 3 種類の配付を希望する者	$ 22.50
雑誌 3 種類プラス年度内の全刊行物を希望する者	$ 37.50

5. 新入会希望者は会費相当額の円貨と，銀行手数料，書留送料を加算した金額を現金書留でお送り下さい。金額は為替相場によって変動しますので，その都度お問いあわせ下さい。

   問いあわせ・送金先

   〒112 東京都文京区音羽 2—12—21　野間教育研究所　阪本　敬彦
6. 雑誌は IRA から直接送られますので，住所氏名には必ずふりがなをつけて下さい。
7. 継続の方は，IRA から Renewal Notice が届いたらすぐに御送金下さい。その際 Renewal Notice を必ず同封して下さい。
8. IRA から会員証を受けとられましたら，会員番号を阪本宛に御通知下さい。
9. この件についてのお問合わせは，野間教育研究所　阪本敬彦　03—945—1111 内線 843 にお願いします。

Vol. 24, No. 3 October, 1980

THE SCIENCE OF READING

Published by **The Japan Reading Association**

President: Michio Namekawa **President-elect**: Eikichi Kurasawa

EDITORS

Takeshi Izumoji Sunao Ohara Takahiko Sakamoto
Kazuko Takagi Junichi Tajika Junya Noji
Shusuke Fukuzawa Shinichi Masuda
John Downing Donald Leton

CONTENTS

Original Articles

A review of psychological research on reading and writing kana letters
……*IMAI, Yasuchika*
FUKUZAWA, Shusuke……77

Toward the semiology of comic strips ……*OSHIRO, Yoshitake*……99

Relationship between reading material and comprehension (3) :
An investigation of legibility factor……*IKEDA, Shinichi*… 112

The relation between titles and words of songs :
Cross-cultural comparisons ……*MORI, Kazuo*… 119

THE SCIENCE OF READING is published four times a year (with an occasional combined-number) as a service to members of the Japan Reading Association. Membership in the Japan Reading Association is open to anyone interested in reading. Please send all applications for membership and queries to Takahiko Sakamoto, Japan Reading Association, Noma-ken, 2-12-21 Otowa, Bunkyo, Tokyo, Japan.

第24巻 第3号

＜通巻 第93号＞

昭和55年10月1日 発行

会員頒布

編集 日本読書学会編集委員会
発行人 阪本一郎
発行所 日本読書学会
〒112
東京都文京区音羽2—12—21
野間教育研究所内
振替東京6-3213番

印刷・第一印刷株式会社